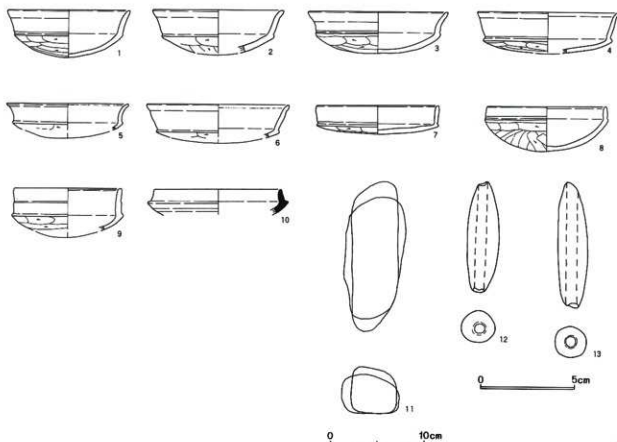


第81図 第59号住居跡出土遺物



第59号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	環	(13.2)	5.0		BCEGH	B	橙	25	
2	環	(14.0)	(4.8)		BCEGH	C	橙	15	
3	環	(15.0)	4.4		BCEGH	B	橙	20	
4	環	(15.2)	(4.4)		BCEGH	B	橙	30	
5	環	(13.2)	(3.7)		BCGH	B	橙	10	
6	環	(15.2)	(4.1)		BCEGH	B	橙	20	
7	環	(13.2)	(3.0)		BCEGH	B	鈍黄橙	30	
8	環	12.8	4.7		BCEGHJ	A	橙	100	
9	鉢	(11.6)	(5.2)		BCGH	A	明赤褐	20	
10	須恵器環	(13.6)			C	B	灰白	15	
11	編物石								2個体
12	土錘	長5.96	径1.95	重20.55					
13	土錘	長6.71	径1.73	重19.31					

第67号住居跡 (第83図)

第67号住居跡はE・F-6・7グリッドに位置する。

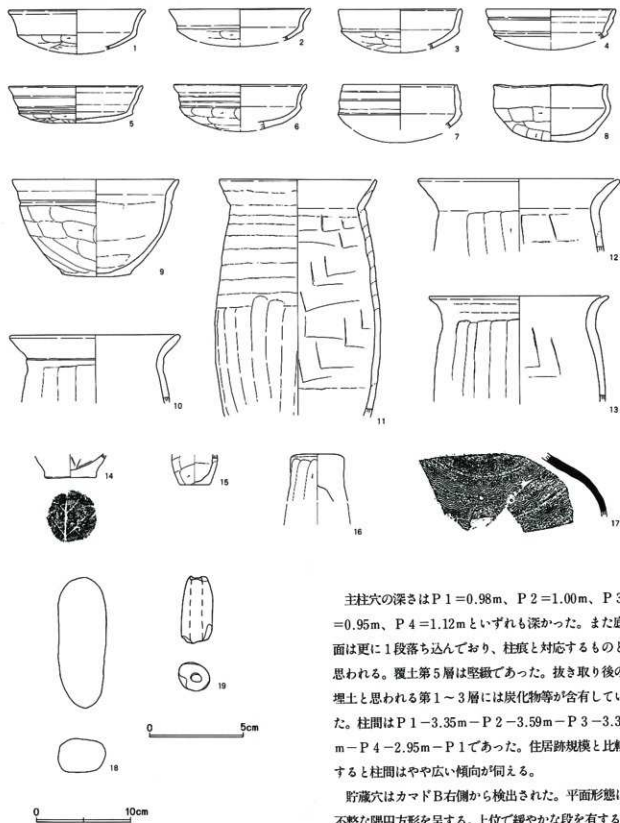
第59・36号住居跡に切られるが、深度が深かったため壁面の一部を壊されていたのみで、床面は第36号住居跡の柱穴に壊されていた以外は遺存していた。

本住居跡からは2基のカマドが検出され、カマドA

の軸方位はN-2°-Wを指す。またカマドBの軸方位はN-90°-Eを示していた。本報告では便宜上、造り替え後のカマドBを主軸方向とする。

主軸長5.66m、副軸長5.80mであり、僅かに歪むが方形を呈している。残存壁高は0.42mと遺存状況は良好であった。

第82図 第36住居跡出土遺物



主柱穴の深さはP1=0.98m、P2=1.00m、P3=0.95m、P4=1.12mといずれも深かった。また底面は更に1段落ち込んでおり、柱痕と対応するものと思われる。覆土第5層は堅緻であった。抜き取り後の埋土と思われる第1～3層には炭化物等が含有していた。柱間はP1-3.35m-P2-3.59m-P3-3.32m-P4-2.95m-P1であった。住居跡規模と比較すると柱間はやや広い傾向が伺える。

貯蔵穴はカマドB右側から検出された。平面形態は不整な隅円方形を呈する。上位で緩やかな段を有する。径0.90×0.77m、深さ0.50mであった。肩部から覆土上層にかけて遺物がまとまって出土した。

第36号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(14.6)	(4.7)		BCEGH	A	明赤褐	20	
2	坏	(15.2)	(4.0)		BCEGH	B	橙	30	
3	坏	(13.4)	(4.6)		BCEGH	C	橙	15	
4	坏	(13.8)	(4.3)		BCEGH	B	赤	10	
5	坏	(14.4)	3.9		BCDEGH	C	橙	35	
6	坏	(14.2)	(5.0)		BCEGH	B	鈍橙	20	内面黒色顕著
7	鉢	(12.4)	(6.1)		BCEGH	B	橙	20	
8	坏	12.2	6.0		BCEGH	C	鈍黄	100	
9	鉢	17.8	10.3	7.4	BCH	A	橙	70	
10	甕	(18.2)			BCEGH	B	橙	35	
11	甕	16.8			BCEH	B	橙	80	
12	甕	(21.5)			BCEGH	B	橙	20	
13	甕	(19.2)			BCEGH	B	橙	20	
14	甕				BCGH	A	鈍橙	100	木炭痕
15	ミソバ			5.4 (3.2)	BCGH	C	鈍黄橙	40	
16	支脚	5.8			BCEGH	B	明赤褐	50	土製
17	須恵器甕				CH	B	灰		
18	編物石								1個体
19	土鍾	長3.55	径1.73	重9.48					

カマドAの右側壁際からも平面形態円形の深さ0.05mの浅いピットが検出された。あるいはカマドAに伴うピットの可能性がある。

カマドは2基検出された。袖の有無等によりカマドAからカマドBへの造り替えと思われる。

カマドAは北壁東よりに位置する。煙道部のみ遺存しており、袖、火床面等は検出されなかった。煙道部長は0.85m、同幅0.24mであった。煙道部底面は緩やかな段を有する。覆土中から焼土、炭化物粒子が検出された。

カマドBは東壁はば中央から検出された。燃焼部長0.63m、同幅0.30mであった。煙道部長は0.68m、同幅0.20mであった。床面と同レベルの燃焼部から急激に立ち上がり煙道部に至る。煙道部底面はやや強く傾斜していた。燃焼部はば中央から21の甕が逆位で検出された。転用支脚の可能性が有る。灰層の発達が顕著

であった。

壁際を全周する壁溝が検出された。壁溝はカマドAの推定燃焼部、袖の部分からも検出された。

出土遺物 (第84・85図)

遺物は主に貯蔵穴周辺およびカマドB周辺から集中して出土した。坏は蓋模倣が主体を占めるが、口径14cm前後のもの15cmを超えるものに2大別される。9の口縁部内面は弱い凹状を呈する。15の有段口縁坏は推定口径16.8cmと大形である。18は貯蔵穴肩部から出土したが、転用器台の可能性もある。

21は転用支脚か想定される甕だが、胴部に2条の紐状の付着痕が認められる。26の瓶内部には炭化粒子が付着していた。27は土製支脚であるが覆土中出土である。29、30は土製勾玉である。北壁際の覆土上層から隣接して出土したが、大きさか明瞭に異なる。編物石は3個体、土鍾も3個体出土している。

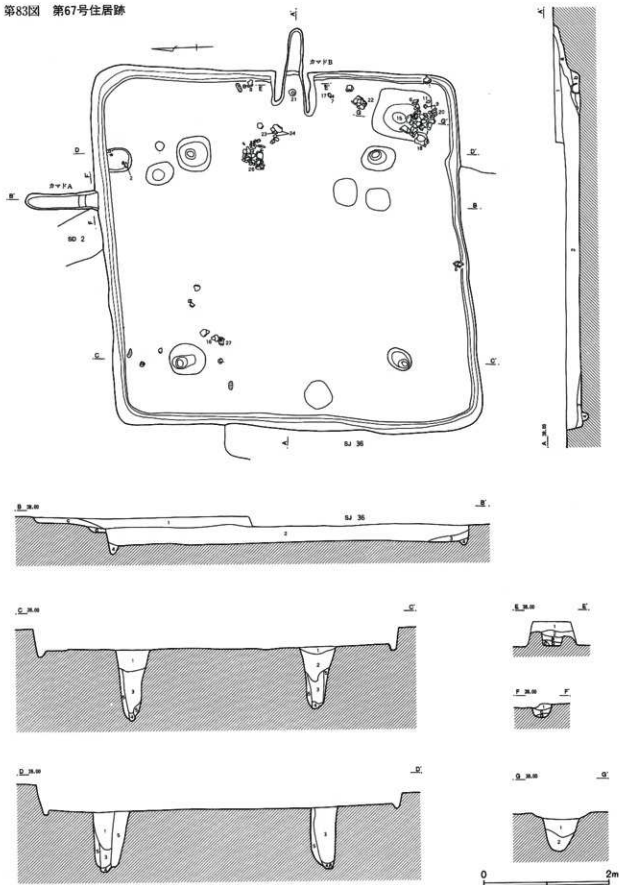
第67号住居跡土層註

- 1 緑灰褐色 炭化物・焼土粒子少量 緑少量
 - 2 緑灰褐色 焼土粒子多量 炭化物粒子少量
 - 3 緑灰褐色 炭化物・焼土粒子多量 灰少量
 - 4 灰褐色 焼土・炭化物粒子少量
- カマド土層註
- a 緑暗灰褐色 焼土ブロック多量 炭化物粒子少量
 - b 緑灰褐色 灰多量 焼土ブロック多量
 - c 緑灰褐色 焼土ブロック少量 炭化物粒子・灰少量
 - d 緑暗灰褐色 灰・焼土ブロック多量 炭化物粒子少量

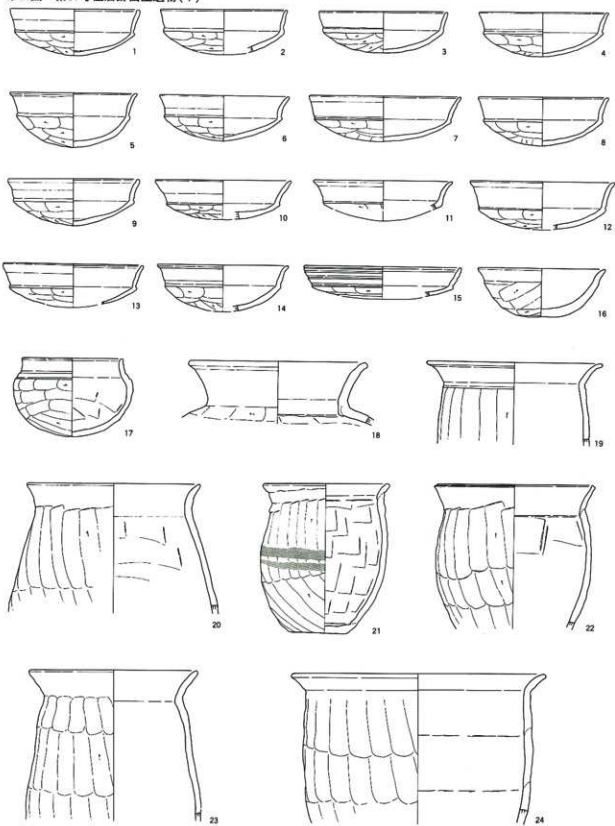
貯蔵穴土層註

- 1 灰褐色 焼土粒子多量 炭化物粒子少量
 - 2 灰褐色 炭化物粒子少量
- 柱穴土層註
- 1 緑灰褐色 焼土粒子多量 炭化物粒子少量
 - 2 灰褐色 焼土・炭化物粒子多量
 - 3 緑暗灰褐色 焼土粒子多量 炭化物粒子少量
 - 4 灰白色 和土質 酸化鉄多量 しまり強し
 - 5 灰黄褐色 3層土混入 しまり強し

第83図 第67号住居跡

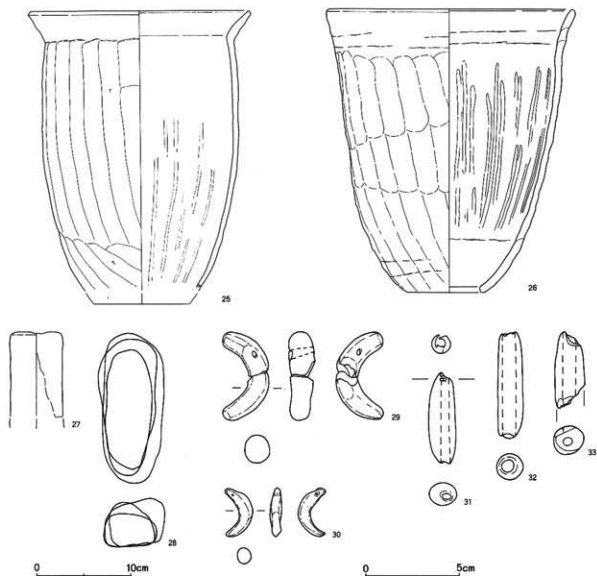


第84図 第67号住居跡出土遺物(1)



0 10cm

第85图 第67号住居跡出土遺物(2)



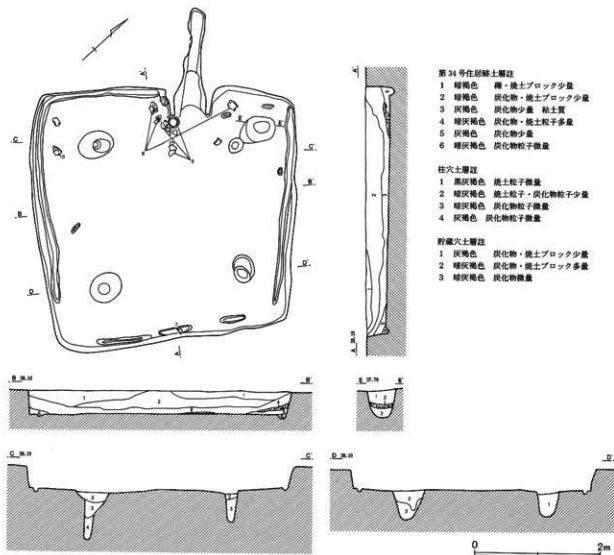
第67号住居跡出土遺物觀察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色调	残存	備考
1.	坏	13.9	4.9		BCEGH	B	橙	90	白色粘土含有
2	坏	(13.6)	(4.6)		BCGH	B	橙	50	
3	坏	(13.8)	4.4		BCEGH	B	橙	45	
4	坏	13.8	4.6		BCEGH	B	橙	70	
5	坏	13.6	5.8		BCEGH	B	橙	85	
6	坏	13.9	4.8		BCDEGH	B	橙	100	
7	坏	16.2	4.7		BCEGH	B	橙	80	
8	坏	13.9	5.1		BCEGH	B	明赤褐	90	
9	坏	14.1	5.0		BCEGH	B	橙	85	
10	坏	(14.4)	(4.2)		BCEGH	B	橙	40	
11	坏	(14.8)	(4.3)		BCEGH	B	橙	20	
12	坏	(15.6)	(5.1)		BCEGH	A	明赤褐	30	
13	坏	(15.0)	(4.6)		BCEGH	B	鈍橙	15	
14	坏	(14.0)	(5.0)		BCEGH	B	橙	15	
15	坏	(16.8)	(3.4)		BCEGH	A	明赤褐	35	
16	碗	13.6	5.0		BCDEGH	C	灰褐	50	

第67号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	懷成	色調	残存	備考	
17	鉢	10.8	8.2		CDEGH	A	明赤褐	75	白色粘土含有	
18	壺	(19.0)			BCEGH	B	橙	100		
19	甕	18.6			BCGH	B	橙	35		
20	甕	18.4			BCGH	B	橙	25		
21	甕	13.6	15.9	6.0	BCEGH	A	明赤褐	100		胴部に2条の組状の付着物
22	甕	17.2			BCDEGH	B	鈍橙	85		
23	甕	(18.0)			BCEGH	B	橙	65		
24	甌	(27.2)			BCEGH	C	鈍黄橙	25		
25	甌	(23.8)	(31.1)	(10.2)	BCGH	B	橙	65		
26	甌	26.4	30.1	8.7	BCEGH	B	橙	90		カマドAと接合 内面 炭化物付着
27	支脚	5.2			CH		橙	40	未焼成	
28	編物石								3個体	
29	勾玉	長4.66	幅1.53	重13.08					土製	
30	勾玉	長2.53	幅0.70	重1.98					土製	
31	土鏝	長4.84	径1.65	重9.69						
32	土鏝	長5.62	径1.58	重13.90						
33	土鏝	長(4.14)	径1.79	重(9.70)					欠損	

第86図 第34号住居跡



第34号住居跡 (第86・87図)

第34号住居跡はF-6グリッドに位置する。他の住居跡との重複関係はなかったが、コーナー部が第36号住居跡と極めて近接する。

主軸方向はN-45°-Wを指す。主軸長4.08m、副軸長4.20mであり、やや歪んだ方形を呈する。覆土第2層は部分的に炭化物および焼土が灰黄褐色土と互層をなしている。また覆土第4層および貯蔵穴第2層には多量の炭化物を含有する。壁溝は東、西側は連続していたが南側は断続しながら巡っていた。

主柱穴の深さはP1=0.45m、P2=0.40m、P3=0.45m、P4=0.75mである。断面形態は不均一である。柱間はP1-2.03m-P2-2.22m-P3-2.29m-P4-2.22m-P1であった。

P1に隣接している貯蔵穴は径0.47×0.37m、深さ0.43mである。遺物は出土しなかった。

カマドは北壁中央僅かに東よりに構築され、燃焼部

長0.74m、同幅0.31mであった。煙道部長は0.98m、同幅0.27mであった。煙道部に部分的に天井が残存していた。

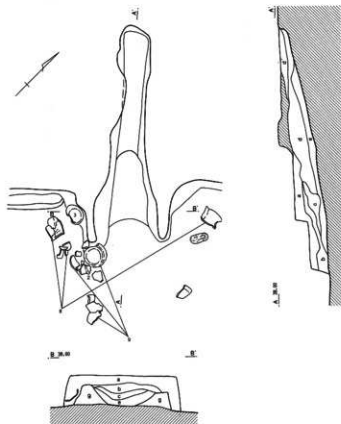
床面と同レベルの燃焼部から立ち上がり、をさずに緩やかに煙道部に移行する。灰層は検出されたが、カマド底面からやや浮いていた。カマド内部からは遺物は出土しなかった。

左袖の先端からは逆位で9の箋が検出された。袖補強材に転用されたものと思われる。また袖の断ち割りを実施したところ、微量の炭化物、焼土粒子が検出された。

出土遺物 (第88図)

遺物はカマド周辺から少量出土した。1の環の口縁部内面には沈線が巡る。2、3は有段口縁環であるが、2は黒色処理が施される。3は左袖に隣接して出土した。端部は沈線状となる。体部が浅い。編物石は4個体出土している。

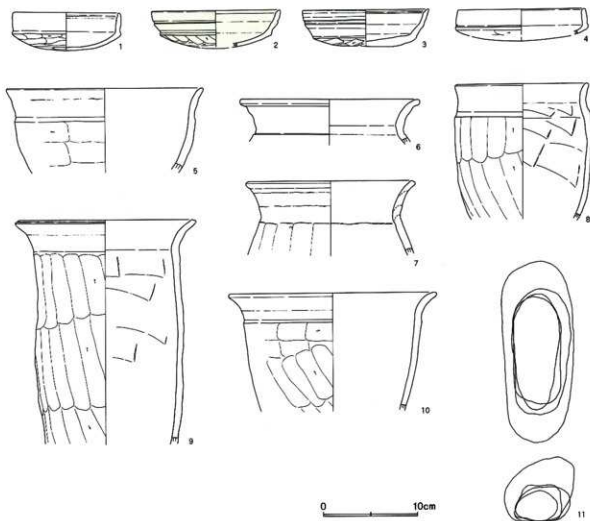
第87図 第34号住居跡カマド



- 第34号住居跡 カマド土層図
- a 黄褐色 焼土粒子・炭化物粒子微量
 - b 黄褐色 焼土粒子・炭化物粒子含有
 - c 灰褐色 灰主体・焼土粒子・炭化物粒子含有 (灰層)
 - d 暗褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量
 - e 暗褐色 焼土ブロック多量
 - f 暗褐色 焼土粒子・炭化物粒子含有
 - f 赤褐色 焼土粒子・ブロック多量
 - 袖補強土
 - g 灰黄褐色 焼土粒子・炭化物粒子微量

0 1m

第88図 第34号住居跡出土遺物



第34号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	环	(11.6)	4.0		BCGH	B	鈍橙	45	口縁内面沈線
2	环	(13.8)	(4.0)		BCEGH	A	黒褐	35	黒色処理
3	环	13.5	3.9		BCDEGHJ	A	褐	100	口縁内面沈線
4	环	(13.6)	(3.4)		BCEGH	A	明赤褐	15	
5	鉢	(21.2)			BCGH	B	明赤褐	15	
6	壺	19.2			BCEGH	A	橙	20	
7	甕	(18.2)			BCGH	A	鈍赤褐	25	
8	甕	14.3			BCEGH	C	鈍橙	85	
9	甕	19.4			BCEGH	B	橙	85	左袖補強材
10	甌	(22.2)			BCGH	B	橙	20	
11	編物石								4個体

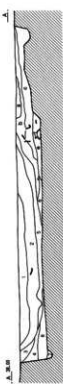
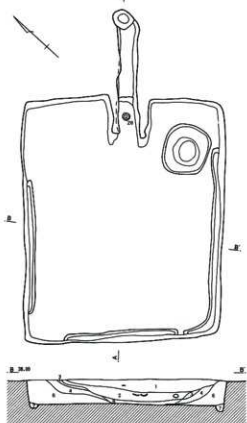
第52号住居跡 (第89・90図)

第52号住居跡はF-6、7グリッドに位置する。他遺構とは重複していなかったが本住居跡煙道部先端が第36号住と近接する。

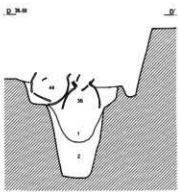
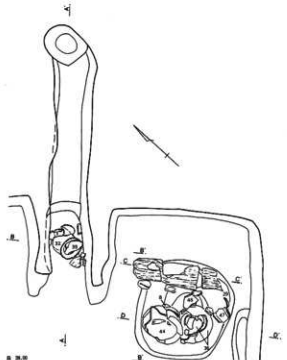
主軸方向はN-48°-Eを指す。主軸長3.87m、副軸長3.16mであり、やや小形の長方形を呈する。

覆土は各層の流入から自然堆積と考えるが、炭化物、焼土等の含有物が多かった。断続的に壁溝が巡るがカ

第89図 第52号住居跡・カマド



- 第52号住居跡土層註
- 1 暗灰褐色 焼土粒子・炭化物・礫少量
 - 2 暗灰褐色 炭化物粒子多量 焼土ブロック・灰・礫少量
 - 3 灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量
 - 4 暗灰褐色 焼土粒子・炭化物多量
 - 5 灰黄褐色 炭化物粒子・灰少量
 - 6 灰褐色 炭化物粒子少量
 - 7 灰褐色 炭化物粒子微量

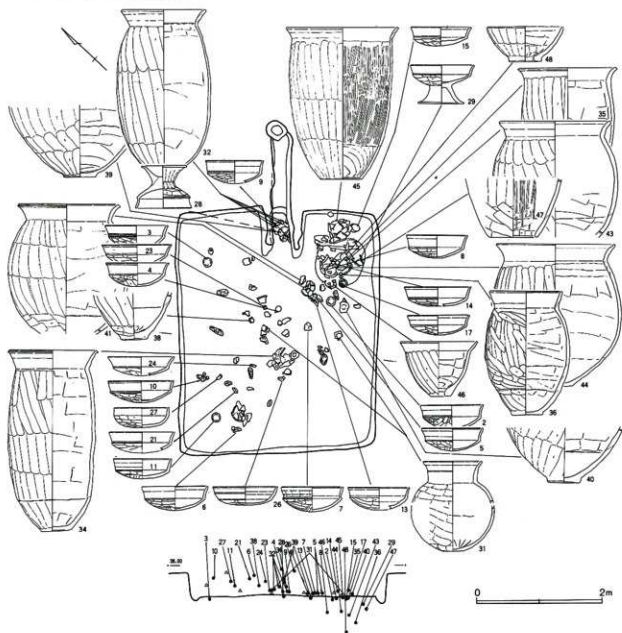


- カマド土層註
- a 灰褐色 焼土ブロック多量 (天井崩落土)
 - b 暗灰褐色 焼土ブロック少量 礫少量
 - c 灰褐色 焼土ブロック多量 灰少量
 - d 灰褐色 炭化物粒子少量
 - e 暗灰褐色 灰燄多量 焼土粒子少量 (灰層)
 - f 灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量 (天井崩落土)
 - g 灰黄褐色 焼土粒子・礫少量 (天井崩落土)

- 野糞穴土層註
- 1 灰褐色 炭化物粒子少量
 - 2 灰褐色 炭化物粒子微量



第90図 第52号住居跡遺物分布図



マダが位置する北壁側からは検出されなかった。

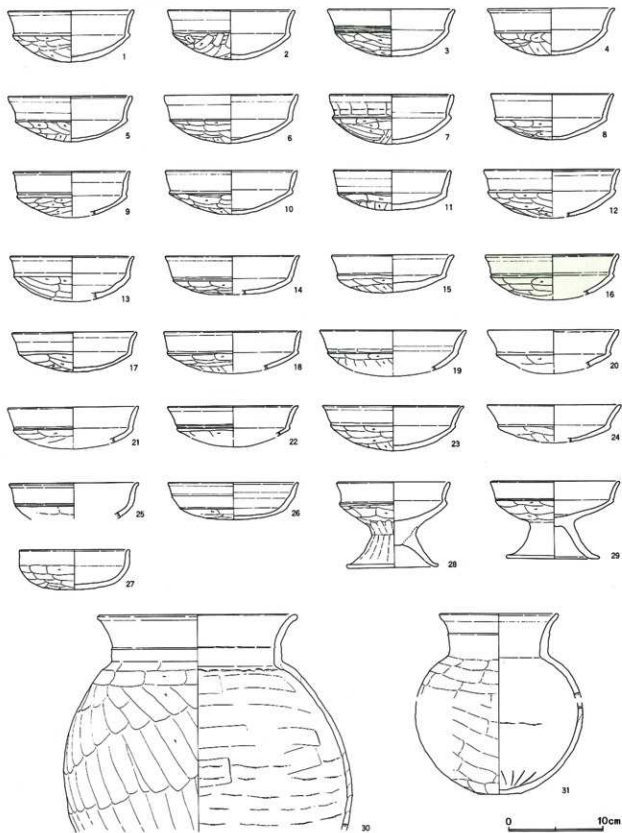
精査を重ねたが、支柱穴等のピットは検出されなかった。

貯蔵穴は平面形態円形を呈し、上位で明瞭な段を有する。径0.73×0.80m、深さ0.73mである。また壁側の肩部からは、板材が出土した。遺存長0.72m厚さ0.5cmであった。中ほどは切り込み状に遺存していたが、明瞭な加工痕はなかった。なお貯蔵穴内からはその他の材は出土しなかったが土器が多量に出土した。

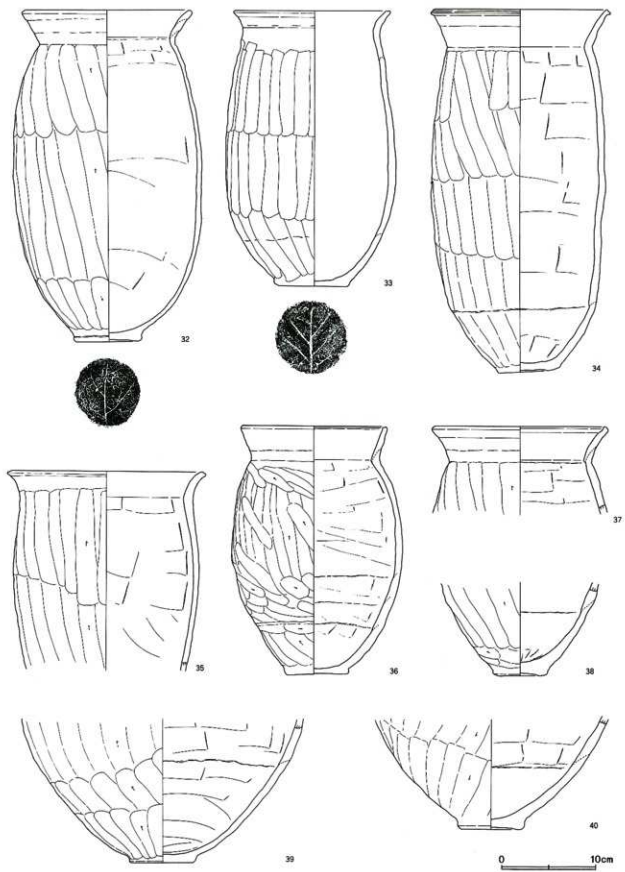
カマドは北壁中央から検出され、燃烧部長0.75m、同幅0.26mであった。煙道部長は1.38m、同幅0.24mであった。床面と同レベルの燃烧部から急激に立ち上がり煙道部に至る。煙道部は緩やかな段を有しながら傾斜していた。先端には深さ0.24mの煙出しピットを有する。左袖はややオーバーハングしていた。灰層は厚さ12cmほど堆積していた。

燃烧部中央には転用支脚として28の高环を逆位に設置しており、その直上から32の甕が出土している。

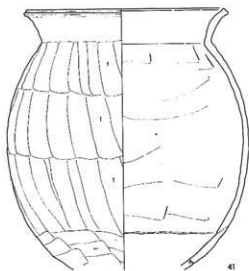
第91図 第52号住居跡出土遺物(1)



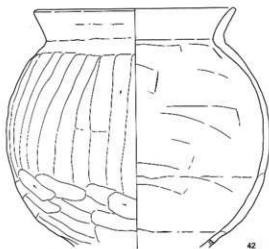
第92图 第52号住居跡出土遺物(2)



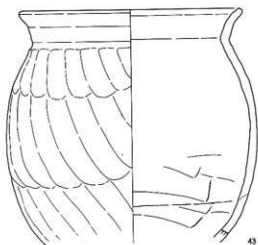
第93图 第52号住居跡出土遺物(3)



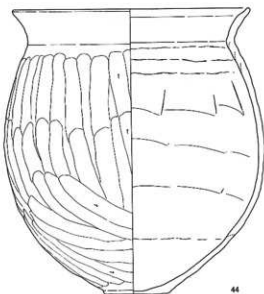
41



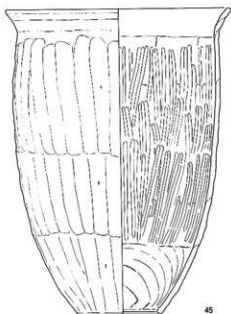
42



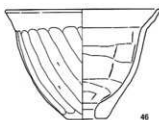
43



44



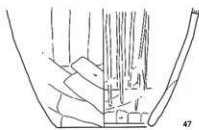
45



46



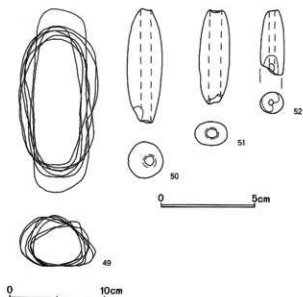
48



47

0 10cm

第94図 第59号住居跡出土遺物(4)



出土遺物(第91~94図)

遺物は貯蔵穴周辺からの出土が顕著であった。貯蔵穴の上位の段に載るように36、44の甕が検出された。また最下層からは48の甕が出土した。

床面に散在する遺物は覆土下層からのものが主体を占める。破砕後の二次被熱が認められる土器も多いことから、埋没段階に流入した遺物も多かったと思われる。なお出土した土器の器種組成としては、大型の壺・甕の出土量が多い傾向にある。

出土した環は口径13~15cm程の差模倣が主体を占めるが、口縁部が上位で小さく外反するものが多い。なお26の環と27の有段口縁環は覆土最上層から出土している。

7の環は小ピッチの断続ナデが口縁部外面に明瞭に残り、口縁部内面には浅い沈線を巡らす。19の環の稜部は棒状工具による断続ナデが残る。

28の高環は環部と脚部の接合痕が観察できた。体部を削り落とさずに脚部を接合したと想定される。29の高環は貯蔵穴の上位の段直上からはほぼ完形で出土した。

壺・甕の口縁端部は34、41のように凹状になるものや、36、37のように内面が沈線状になるものがある。32の甕胴部内面には水平の黑色付着物が認められた。

45の大形の甕は貯蔵穴北側の床面直上から出土した。

47は貯蔵穴覆土中出土である。46は小形の甕で孔は2cmである。48の多孔式の甕は割れ口に擦痕はなかったが、ほぼ水平であったため擬口縁と考えられる。孔は径0.3cmと小さい。

31の壺は覆土下層出土だが破砕後の二次被熱が明瞭に残っていた。それ以外に二次被熱が観察されたものとして22、24、41、43が挙げられる。

編物石は覆土を中心に7個体出土した。土鍾は3個体出土している。

第9号住居跡(第95・96図)

第9号住居跡はG-6グリッドに位置する。他遺構との重複はなかった。主軸方向はN-53°-Wを指す。主軸長4.55m、副軸長4.73mであり、方形を呈する。覆土は各層の流入から自然堆積と考えられるが、第3層は炭化物層である。

南、東側に壁溝が巡り、2基の小ピットが東側の壁溝内から検出された。

主柱穴の深さはP1=0.35m、P2=0.22m、P3=0.28m、P4=0.29mである。柱間はP1-2.13m-P2-1.75m-P3-2.02m-P4-1.77m-P1であった。住居跡規模からするとややP2-3、P4-1間が狭いと言える。

貯蔵穴は平面形態が隅四方形を呈し、上位で段を有する。径0.62×0.51m、深さ0.21mである。遺物は出土しなかった。

カマドは西壁中央から2基検出され、カマドAには袖がなかったためAからBへ造り替えたと想定される。

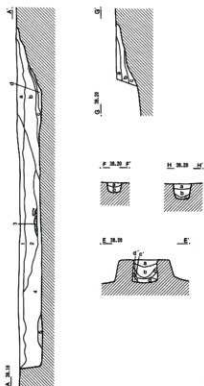
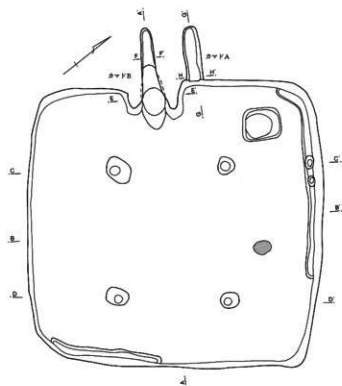
残存するカマドAは煙道部長0.85m、同幅0.27mであり、床面から緩やかに傾斜する。最下層に灰層が残存していた。

カマドBは煙道部長0.52m、同幅0.37m、煙道部長0.95m、同幅0.19mであり床面より僅かに低い燃焼部から緩やかに傾斜して煙道部に至る。煙道部底面は緩やかな段を有しながら傾斜していた。袖内面の被熱硬化が顕著であった。灰層の発達は顕著であった。なおカマドA、Bの煙道はいずれも住居跡主軸よりやや南にぶれていた。

第52号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	13.4	5.5		BCGH	B	橙	70	
2	坏	13.4	5.2		BCDEFG	B	橙	100	
3	坏	13.7	5.0		BCDGHJ	B	橙	100	
4	坏	13.6	5.0		BCGH	B	橙	100	
5	坏	13.2	4.9		BCGH	B	橙	95	
6	坏	14.2	5.1		BCEGH	B	橙	65	覆土上層
7	坏	13.2	5.3		BCEGH	A	鈍赤褐	70	口縁部 断続ヨコナゲ明瞭
8	坏	13.0	4.8		BCEGH	B	橙	90	
9	坏	(12.6)	(4.9)		BCEGH	A	橙	35	
10	坏	14.1	4.7		BCEGH	A	明赤褐	90	覆土上層
11	坏	12.6	4.3		BCDEFGH	B	橙	100	覆土上層
12	坏	(14.4)	(5.1)		BCGH	B	橙	35	
13	坏	(13.2)	(4.8)		BCGH	B	橙	35	
14	坏	(14.2)	(4.6)		BCGH	B	橙	25	
15	坏	13.0	4.0		BCEGH	A	橙	100	
16	坏	(14.2)	(4.8)		BCGH	C	鈍橙	25	黑色処理
17	坏	13.3	4.2		BCGH	B	橙	95	
18	坏	(14.6)	(4.4)		BCEGH	B	鈍赤褐	25	
19	坏	(15.6)	(4.9)		BCGH	A	明赤褐	25	
20	坏	(14.0)	(4.6)		BCGH	A	橙	15	
21	坏	(14.0)	(4.4)		BCGH	B	橙	25	覆土上層
22	坏	(14.0)	(4.4)		BCEH	A	橙	40	二次被熱
23	坏	(15.0)	4.8		BCEGH	C	鈍褐	40	
24	坏	(14.2)	(4.0)		BCEH	A	赤	20	二次被熱
25	坏	(13.8)			BCGH	A	橙	25	
26	坏	(14.0)	(4.0)		BCEGH	A	赤褐	15	覆土上層
27	坏	11.8	4.2		BCEGH	C	鈍黄橙	60	覆土上層
28	高坏	12.0	9.1	9.7	BCEFGH	B	橙	100	転用支脚
29	高坏	13.7	8.2	10.0	BCEGH	A	橙	95	
30	壺	21.2	(23.0)		BCDGH	A	鈍橙	100	
31	壺	12.6	19.2	5.0	BCGH	A	橙	60	破砕後二次被熱
32	甕	18.2	35.1	6.4	BCDEGH	B	橙	80	カマドと貯蔵穴と接合 水平黑色化 木葉痕
33	甕	(16.7)	28.6	(7.8)	BCGH	A	橙	70	カマド 木葉痕
34	甕	19.2	38.8	6.6	BCEGH	B	鈍赤褐	65	
35	甕	(21.4)			BCEGH	A	鈍赤褐	45	
36	甕	15.6	26.3	6.6	BCEGH	A	明赤褐	85	貯蔵穴
37	甕	(18.8)			BCEGH	C	橙	25	
38	甕			5.8	BCEGH	A	橙	40	
39	甕			7.2	BCDEGH	A	灰褐	80	カマド
40	甕			7.0	BCEGH	A	黒褐	40	
41	甕	(20.8)			BCEGH	A	灰黄褐	40	破砕後二次被熱
42	甕	21.4			BCEGH	B	橙	70	
43	甕	(24.0)			BCEGH	A	橙	30	貯蔵穴 破砕後二次被熱
44	甕	25.4	30.2	6.9	BCEGH	B	橙	100	貯蔵穴
45	甕	24.2	32.4	9.0	BCGH	B	橙	95	
46	甕	16.6	11.6	4.2	BCEGH	A	橙	100	孔径=2.0cm
47	甕			(10.4)	BCEGH	C	灰黄褐	20	
48	甕	[16.4]	[7.4]	(7.0)	BCEGH	B	鈍橙	85	貯蔵穴 擬口縁 孔径=0.3cm
49	編物石								7個体
50	土錘	長5.97	径2.11	重23.36					
51	土錘	長5.02	径1.73	重11.37					
52	土錘	長(3.46)	径1.42	重(6.45)					欠損

第95図 第9号住居跡



第9号住居跡土層註

- 1 黄褐色 焼土粒子・粘土・炭化物粒子少量
- 2 褐色 焼土・炭化物多量
- 3 暗褐色 炭化物極多量(炭化物層)
- 4 褐色 焼土・炭化物粒子多量
- 4' 褐色 炭化物粒子多量
- 5 灰白色 粘土質

柱穴土層註

- 1 暗灰褐色 酸化鉄粒子少量 炭化物粒子微量
- 1' 暗灰褐色 炭化物粒子・焼土粒子多量
- 2 暗褐色 炭化物粒子少量
- 2' 暗褐色 炭化物粒子・焼土粒子多量
- 3 褐色 酸化鉄粒子多量 炭化物粒子微量

カマドA土層註

- a 黒褐色 炭化物粒子少量 焼土粒子・酸化鉄粒子微量
- b 暗褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量 酸化鉄粒子多量
- c 黒色 灰多量 焼土粒子微量 炭化物粒子少量(灰層)

カマドB土層註

- a 灰褐色 灰褐色粘質土ブロック多量
焼土粒子・炭化物粒子微量(天井崩落土)
- b 灰褐色 灰褐色粘質土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子少量
- c 赤褐色 焼土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子多量
- c' 暗赤褐色 焼土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子多量
- d 黒色 焼土ブロック・焼土粒子少量 炭化物粒子多量(灰層)
- d' 黒色 炭化物・焼土ブロック・焼土粒子微量

0 2m

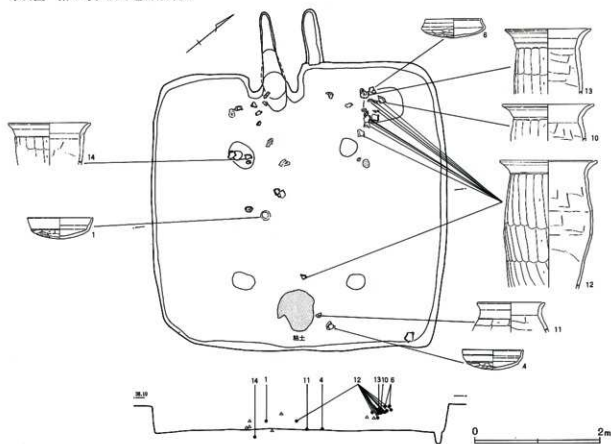
焼土が東壁よりの床面直上から検出された。また東壁際床面直上からは厚さ3cmほどの白色粘土が検出された。

出土遺物(第97図)

遺物は主に覆土上層出土のものか床面直上のものがある。10、12、13の甕、6の環は覆土上層出土である。

5、6、7の須恵器身模倣の環はいずれも体部の稜が鈍く口縁部が長い。6の胎土中には、白色粘土がマ

第96図 第9号住居跡遺物分布図



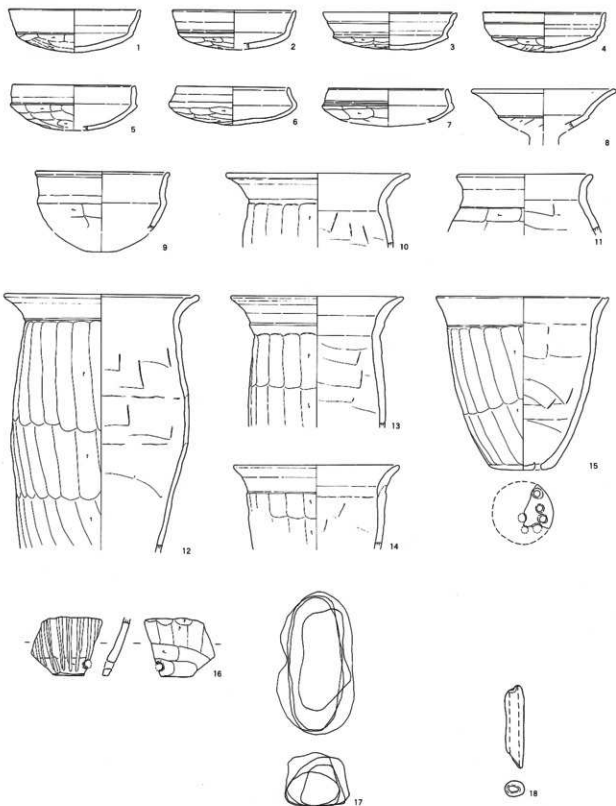
第9号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	14.2	4.6		BDFGH	B	鈍赤褐	100	
2	坏	13.2	(4.1)		BCEGH	C	明赤褐	65	
3	坏	14.3	4.0		BCGH	B	橙	80	
4	坏	13.4	4.2		BCEGH	B	赤	70	二次被熱
5	坏	(13.4)	(4.8)		BCEGH	A	明赤褐	20	
6	坏	12.2	4.1		BCGH	C	橙	70	覆土上層 胎土白色粘土含有
7	坏	(12.8)	(3.9)		BCEGH	A	橙	25	カマド
8	高坏	(15.6)			BCGH	B	橙	15	
9	鉢	(14.4)	(8.5)		BCEGH	A	褐灰	15	
10	甕	(19.6)			BCGH	B	灰黄褐	25	覆土上層
11	甕	(14.6)			BCEGH	B	橙	25	
12	甕	20.8			BCDEGH	A	橙	70	覆土上層
13	甕	(18.5)			BCEGH	A	橙	30	覆土上層
14	甕	(17.8)			BCGH	A	褐灰	25	
15	甕	(18.4)	18.4	(6.4)	BCEGH	B	鈍橙	45	多孔
16	甕				BCGH	B	橙	5	焼成前穿孔 4個体
17	編物石								
18	土鍬	長4.40	径1.20	重4.27					

一ブル状に認められる。4の有段口縁坏は内外面とも二次被熱が認められた。15は多孔式の甕である。孔径はおよそ0.6cmである。16は甕底部片である。底部直

上に焼成前に径0.4cmの孔が穿たれる。編物石は覆土下層を中心に4個体出土している。土鍬は1個体出土した。

第97图 第9号住居跡出土遺物



0 10cm

0 5cm

第6号住居跡 (第98図)

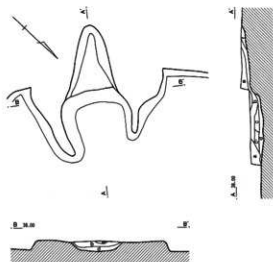
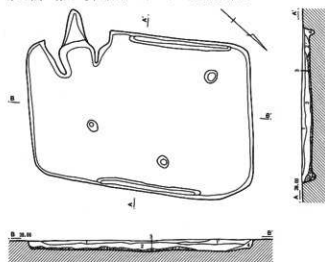
第6号住居跡はG-6、7グリッドに位置する。他遺構との重複はなかったが、北東コーナー部が11号住と極めて近接する。主軸方向はN-135°-Wを指す。主軸長2.54m、副軸長3.55mである。各コーナー部は僅かに円みを帯びるが、横長の長方形を呈する。南、北壁際のみ壁溝が巡る。

覆土最下層には炭化物層が認められた。また南壁際に堆積していた2'層からは焼土が多量に検出された。

明瞭な柱穴、貯蔵穴はなかった。検出された3基のピットはいずれも深さ0.1m内の浅いものである。

カマドは南西コーナー部に構築されていた。残存煙道部長0.50mであり、床面から僅かに落ち込み燃焼部

第98図 第6号住居跡・カマド・遺物分布図



からやや急に立ち上がり煙道部に移行する。袖の遺存状況は悪かった。

床面からは炭化物、炭化材片が検出された。炭化材の遺存状況は悪く、加工痕等は認められなかった。また出土傾向にも規則性は認められなかった。

土師器小片等が少量出土したが図化できるものはなかった。

第33号住居跡 (第99図)

第33号住居跡はF-8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第29号住居跡の壁上面を切っていた。また重複部分は灰褐色の貼床が検出された。

主軸方向はN-15°-Eを指す。主軸長3.75m、副軸長3.70mであり、方形を呈する。

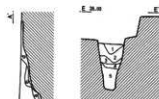
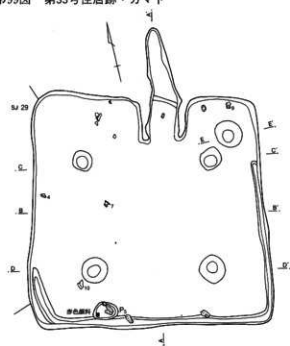
第6号住居跡土層注

- 1 黄褐色 砂少量 炭化物粒子微量
- 1' 黄褐色 黄褐色土ブロック少量
- 2 灰褐色 砂分・炭化物粒子・炭化材片多量
- 2' 灰褐色 焼土粒子多量
- 3 灰褐色 炭化物粒子・炭化材多量 (炭化物層)
- 4 褐色 炭化物粒子少量

カマド土層注

- a 灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子微量 (天井崩落土)
- b 褐色 炭化物粒子・炭化材・焼土粒子・焼土ブロック多量
- c 黒褐色 炭化材片主体
- c' 黒褐色 炭化材片・焼土粒子多量
- d 褐色 炭化物粒子・炭化材片・焼土粒子多量
- e 明灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子微量
- f 明灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子微量

第99図 第33号住居跡・カマド



第33号住居跡土層註

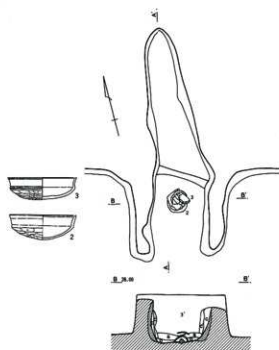
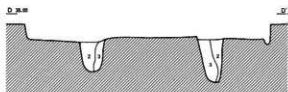
- 1 暗灰褐色 酸化鉄・焼土粒子多量
炭化物粒子少量
- 2 暗褐色 焼土・炭化物粒子多量
- 3 暗灰褐色 酸化鉄粒子少量・焼土粒子多量
炭化物粒子微量
- 4 褐色 酸化鉄粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量
- 4' 褐色 焼土粒子少量

柱穴土層註

- 1 暗灰褐色 炭化物粒子・焼土ブロック少量
- 2 暗灰褐色 炭化物・焼土ブロック少量
- 3 灰褐色 炭化物粒子微量
- 3' 灰褐色 焼土粒子少量

貯蔵穴土層註

- 1 灰色 焼土粒子・炭化物少量
- 2 灰黄褐色 焼土粒子微量
- 3 暗灰褐色 炭化物粒子微量 焼土粒子少量
- 4 黄白色 灰色粘土少量
- 5 黄白色 粘土質

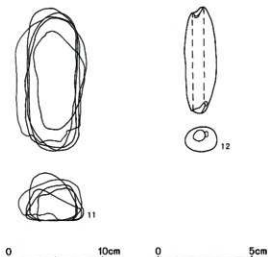
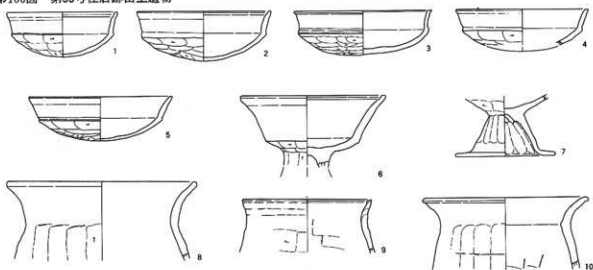


カマド土層註

- a 暗灰褐色 灰主体 (灰層)
- b 赤褐色 焼土主体 (焼土層)
- c 暗灰褐色 焼土ブロック多量
(焼納焼土)
- c' 暗灰褐色 炭化物少量
- d 黄褐色 酸化鉄粒子多量
焼土粒子微量



第100図 第33号住居跡出土遺物



覆土は各層の流入から自然堆積と考える。南、東壁際から壁溝が検出された。

主柱穴の深さはP 1=0.51m、P 2=0.70m、P 3=0.46m、P 4=0.23mである。柱間はP 1-1.67m

第33号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(11.8)	4.8		BCEGH	A	明赤褐	25	口縁部内面洗練
2	坏	14.3	5.3		BCEGH	B	橙	95	カマド
3	坏	14.7	4.7		BCEGH	A	明赤褐	90	カマド
4	坏	(14.0)	(4.5)		BCEGH	B	橙	30	
5	坏	(15.4)	4.7		BCGH	B	橙	35	
6	高坏	15.6			BCGH	B	橙	70	ゆがみ強し
7	高坏			10.6	BCEGH	B	橙	90	
8	甕	(20.4)			BCGH	B	橙	20	歪角様多
9	甕	(13.8)			BCEGH	B	黒	25	焼成・胎土精錬良好 端部平坦
10	甕	(17.6)			BCGH	B	橙	35	
11	編物石								5個体
12	土鍾	長5.72	径1.77	重13.65					

-P 2-1.90m-P 3-1.73m-P 4-2.05m-P 1であった。

カマド右側に構築される貯蔵穴は径0.40×0.42mと平面規模は小さいが、深さは0.80mと深かった。遺物は出土しなかった。

また北壁際より検出されたP 5は径0.39×0.26m、深さ0.06mと小さいが中から3個体の編物石および赤色顔料の小塊が出土した。

カマドは北壁中央僅かに東よりから検出された。床面より僅かに低い燃焼部から急激に立ち上がり煙道部に移行する。煙道部は緩やかに傾斜している。燃焼部長0.72m、同幅0.41m、煙道部長1.10mである。燃焼部中央から自然石製の支脚が検出された。煙道部は住居跡主軸からやや西にぶれる。軸内面の被熱硬化は顕著であった。またカマド前方の床面の硬化が顕著であ

った。灰層の発達は顕著であったが、その直下には焼土層が堆積していた。

出土遺物 (第100図)

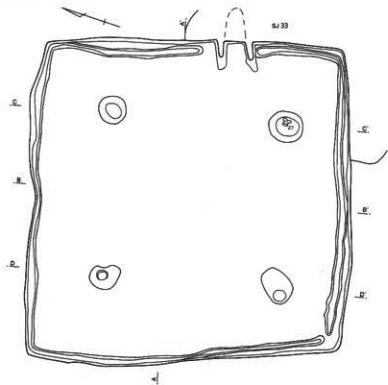
少量の遺物が主に覆土下層から出土した。またカマド内面の石製支脚の直上から2の環が逆位で検出され、その上面を3の環が逆位で覆っていた。

編物石はP5底面直上を中心に5個体出土した。土鍾は1個体出土した。

第29号住居跡 (第101・102図)

第29号住居跡はE-7、F-7・8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第33号住居跡に切られるが、遺構が深かったためカマド煙道部以外は検出する

第101図 第29号住居跡



第29号住居跡土層註

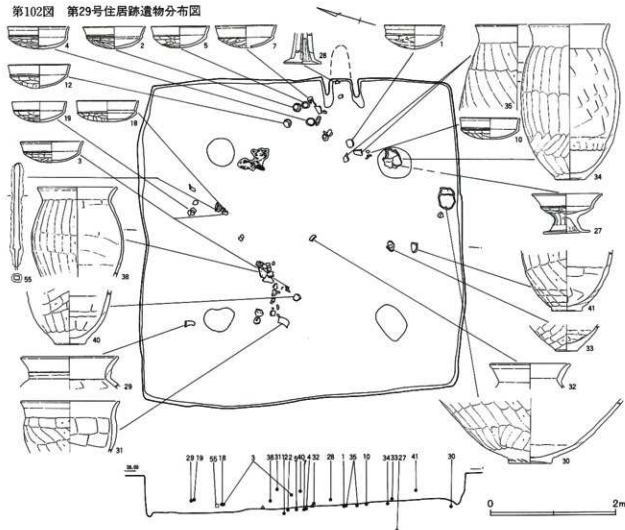
- 1 灰褐色 酸化鉄粒子多量 焼土
・炭化物粒子少量
- 2 褐色 酸化鉄粒子・焼土粒子少量
炭化物粒子多量
- 2' 褐色 黄褐色土ブロック多量
- 3 灰色 炭化物極多量 (炭化物層)
- 4 黒褐色 炭化物・灰色粘土ブロック多量
- 5 褐色 酸化鉄粒子多量 焼土粒子少量
炭化物粒子少量
- 6 暗灰褐色 酸化鉄粒子多量 焼土粒子少量
炭化物粒子少量
- 7 暗灰褐色 焼土粒子少量 炭化物粒子多量
炭化物極多量 (炭化物層)
- 8 灰褐色 炭化物極多量 (炭化物層)

柱穴土層註

- 1 灰褐色 炭化物粒子多量
- 2 灰色 炭化物粒子多量
- 3 灰色 炭化物粒子少量
- 4 灰黄褐色 炭化物粒子少量
- 5 灰黄褐色 炭化物粒子少量 しまり強し

0 2m

第102図 第29号住居跡遺物分布図



ことが出来た。

主軸方向はN-73°-Eを指す。主軸長5.05m、副軸長5.05mであり、方形を呈する。

覆土は各層の流入から自然堆積と考えるが、各層とも炭化物の含有が目立ち、特に中層の第3層と最下層の第8層は炭化物層である。また覆土を切って噴砂が確認されたが住居跡形態に対する影響は顕著ではなかった。ただし南東部の床面が僅かに高いのはあるいは噴砂の影響かもしれない。南西コーナー部のみ断絶する壁溝が巡る。

主柱穴の深さはP1=0.78m、P2=0.72m、P3=0.67m、P4=0.68mである。柱間はP1-2.63m-P2-2.84m-P3-2.60m-P4-2.78m-P1であった。精査を重ねたが貯蔵穴は存在しなかった。

カマドは東壁中央やや南よりから検出された。煙道部は第33号住居跡に壊されていた。床面と同レベルの燃焼部から急激に立ち上がり煙道部に移行すると想定される。燃焼部長0.45m、同幅0.30m、煙道部長0.52mである。

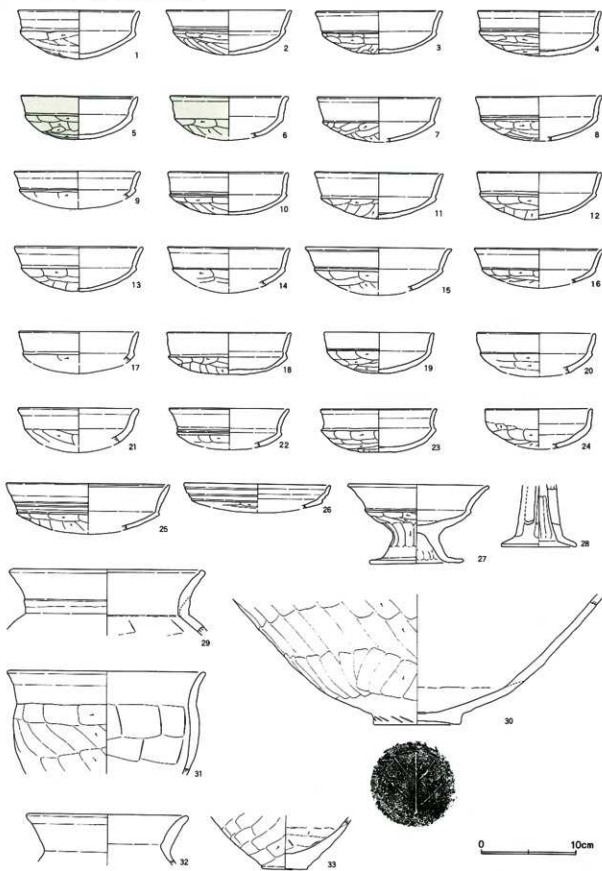
床面直上からは炭化物が検出されたが、P4周辺のみに限られていた。

出土遺物 (第103・104図)

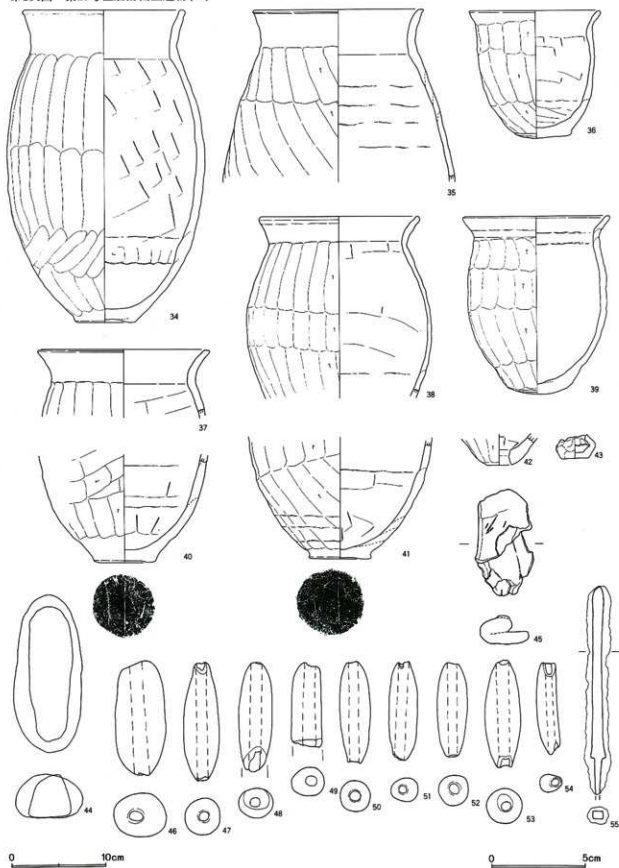
遺物は覆上下層から床面直上にかけて比較的多数出土した。またP1覆土中からも遺物が出土した。

27の完形の高杯は柱痕覆土と想定される柱穴第3層からの出土である。またその上層からは34の甕が出土している。カマド左前部からは杯が比較的まとまって出土している。4の坏底面には靱玉痕が認められる。

第103图 第29号住居跡出土遺物(1)



第104図 第29号住居跡出土遺物(2)



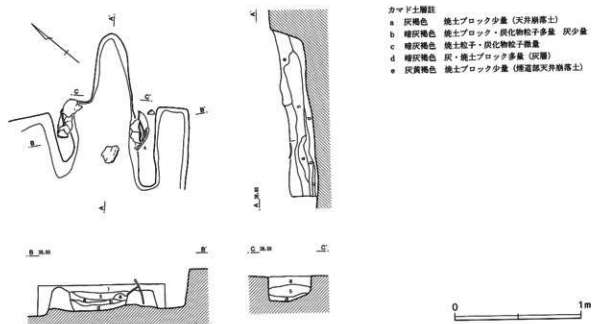
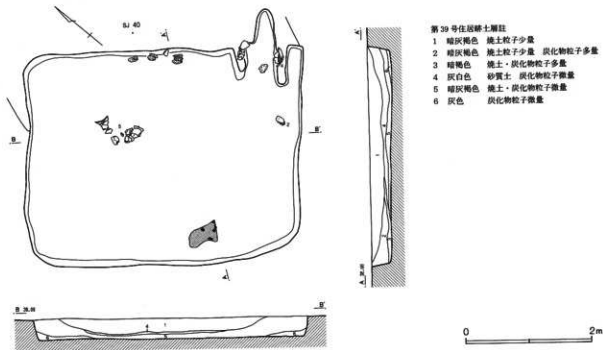
第29号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	13.0	5.2		BEGHIJ	B	橙	100	
2	坏	13.4	4.7		BEGH	B	橙	100	
3	坏	13.6	4.5		BCEGH	A	明赤褐	100	覆土上層
4	坏	13.2	4.8		BCDEGH	B	鈍橙	100	体部外面靱圧痕
5	坏	12.4	4.6		BCEGH	A	赤黒	100	外面黒色処理
6	坏	12.8	(4.7)		BCEGH	B	黒	35	外面黒色処理
7	坏	(13.2)	(4.7)		BCEGH	B	橙	45	
8	坏	(13.5)	(4.7)		BCGH	B	橙	45	
9	坏	(13.4)	(3.9)		BCGH	C	橙	25	
10	坏	(12.8)	4.5		BCEGH	B	橙	35	
11	坏	(13.8)	(4.9)		BCGH	B	橙	30	
12	坏	13.3	5.0		BCEGH	B	橙	80	
13	坏	13.8	4.7		BCEGH	A	橙	55	
14	坏	(13.0)	(4.8)		BCEGH	A	明赤褐	15	
15	坏	(15.6)	(5.0)		BCGH	A	橙	25	
16	坏	(13.8)	(4.2)		BCGH	A	鈍褐	15	
17	坏	(12.8)	(4.4)		BCGHI	B	橙	25	
18	坏	13.3	4.4		BCEGH	B	鈍橙	70	
19	坏	(11.8)	4.3		BCEGH	A	明赤褐	60	覆土上層
20	坏	(12.7)	(4.6)		BCGH	C	橙	15	
21	坏	12.8	(4.7)		BCEGH	A	鈍赤褐	20	
22	坏	(12.8)	(14.3)		BCEGH	C	橙	15	
23	坏	(12.4)	4.6		BCGH	A	橙	60	
24	坏	11.4	(4.3)		BCGH	B	橙	90	
25	坏	17.4	(5.3)		BCEGH	B	橙	60	
26	坏	(15.6)	(3.0)		BCEGH	A	鈍褐	15	
27	高坏	15.0	8.3	9.9	BCEGH	A	明褐	100	P 1 覆土中
28	高坏				GH	A	明赤褐	30	カマド SJ-33と接合 透かし推定 4 単位
29	壺	(20.8)		9.0	BCGH	B	橙	30	覆土上層
30	壺				BCDEGH	B	鈍橙	70	木葉痕
31	鉢	21.2			BCEGH	B	橙	35	覆土上層
32	壺	(17.2)			BCGH	B	橙	25	
33	壺		5.0		BCEGH	A	橙	100	
34	壺	17.4	33.0	6.5	BCEGH	B	鈍橙	100	P 1 覆土上層
35	壺	18.4			BCEGH	B	橙	30	
36	壺	14.0	13.5	5.9	BCE	A	橙	75	二次被熱顕著
37	壺	18.4			BCEGH	C	灰褐	25	
38	壺	17.2			BCEGH	A	鈍赤褐	60	覆土上層
39	壺	15.8	18.9	6.2	BCGH	C	鈍褐	70	
40	壺			6.8	BCEGH	A	鈍赤褐	20	覆土上層 木葉痕
41	壺			6.4	BCEGH	A	灰褐	40	木葉痕
42	瓶				BCEGH	A	黒褐	60	孔径=2.6cm
43	ミニチュア	2.8	2.5	2.8	BCEGH	A	橙	55	
44	編物石								2個体
45	不明土製品	長5.64	幅3.05	重17.42					
46	土鐮	長6.08	径2.75	重42.74					
47	土鐮	長6.27	径2.03	重23.48					
48	土鐮	長(5.78)	径1.91	重19.93					
49	土鐮	長(4.54)	径(1.82)	重(12.00)					欠損
50	土鐮	長5.43	径1.81	重14.61					欠損
51	土鐮	長5.29	径1.68	重12.70					
52	土鐮	長4.95	径1.72	重13.90					
53	土鐮	長5.69	径2.10	重22.69					
54	土鐮	長4.97	径1.33	重6.41					
55	鉄鏝	長(11.1)	鍔身幅0.5	鍔身厚0.4	茶幅0.3				錆化顕著 X線撮影実施

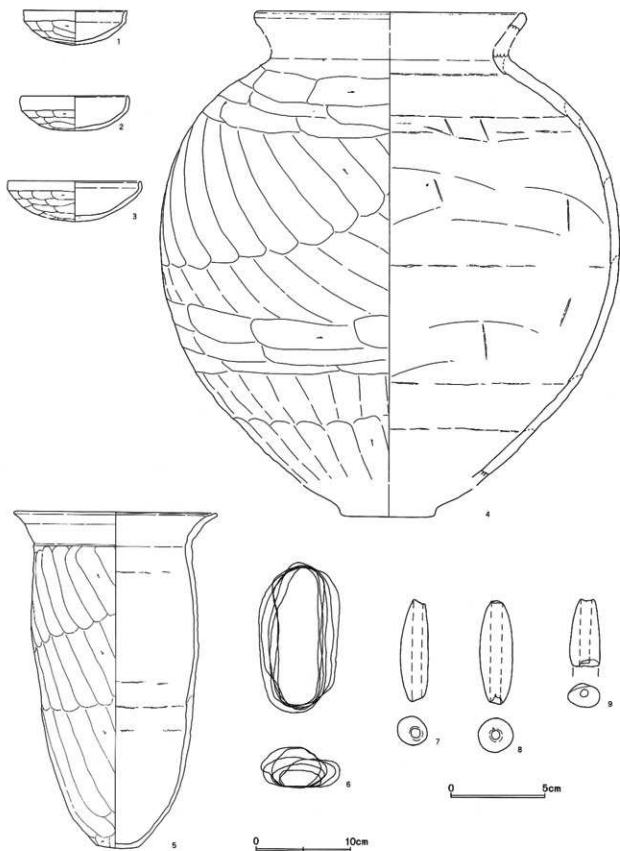
(図版73参照)。28は須恵器模倣の土師器高環の脚部である。残存率が低く環部の形態は不明であるが、脚部径は小さく裾部は強く開く。長方形の透かし穴が認められる。外面調整は縦位のヘラケズリである。カマ

下覆土中から出土した。45は焼成を受けた粘土片である。二つに折り返される。部分的に砂粒の移動が認められるが、土器製作時のケズリ削片かは不明である。また覆土中からは9個体の土鍬が出土した。

第105図 第39号住居跡・カマド



第106图 第39号住居跡出土遺物



第39号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	11.1	3.6		BCEH	B	橙	55	
2	坏	(11.4)	3.6		BCH	B	橙	40	
3	坏	14.3	4.3		BCGH	B	橙	85	カマド
4	壺	(29.2)	(54.0)	(10.0)	BCEGH	A	橙	25	カマド 袖補強材
5	甕	21.8	35.5	4.5	BCDEGH	A	明赤褐	90	
6	編物石								6個体
7	土鉢	長5.47	径1.62	重12.55					
8	土鉢	長5.43	径1.90	重16.94					
9	土鉢	長(3.61)	径(1.69)	重(7.97)					欠損

第39号住居跡 (第105図)

第39号住居跡はF・G-7グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第40号住居跡の南半分を壊す。主軸方向はN-50° -Eを指す。

主軸長3.44m、副軸長4.30mであり、横長の長方形を呈する。南壁は僅かに内押し、各コーナー部は僅かに円みを帯びる。

覆土は各層の流入から自然堆積と考えるが、下層の第3層には焼土、炭化物が多量に含有していた。

精査に努めたが、貯蔵穴、ピット、壁溝はなかった。

カマドは北東コーナー付近より検出されたが、右袖と東壁の間には幅0.2mほどの床面が確認できた。床面と同レベルの燃焼部から緩やかに煙道部に移行する。カマド長1.20m、燃焼部幅0.42mであった。燃焼部は左側奥がやや広がっていた。支脚は検出されなかった。

灰層の発達か顕著で厚さ6cmほど堆積していた。両袖とも4の大型の土器片を袖補強材に用いていたが、それ以外にカマド内部からの遺物の出土はなかった。

住居跡南側床面直上からは炭化物および焼土の集中箇所が検出されたが、極めて小範囲であった。

出土遺物 (第106図)

少量の遺物が出土した。1、2の蓋模倣の坏はいずれも口径11cmと小さく、部品の稜がやや鈍い。3はカマド覆土中より出土した。口縁部が小さく内屈する。体部へラケズリは口縁部直下から施される。

4は袖補強材に転用されていた壺である。残存率はおよそ1/4だが、推定口径29.2cm、推定器高54.0cmと非常に大形である。なおカマド使用時の二次被熱痕は

不明瞭であった。

また編物石が北壁際を中心に6個体出土している。長さ16cm、幅8cm前後で形態は近似している。土鉢は覆土中より3個体出土している。

第40号住居跡 (第107・108図)

第40号住居跡はF-7グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第39号住居跡に南半分を壊されていた。なお39号住居跡の床面は本住居跡よりもおよそ9cm低かった。

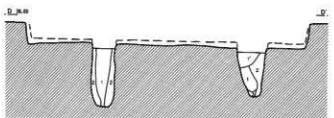
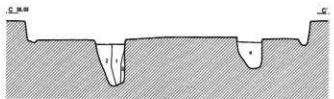
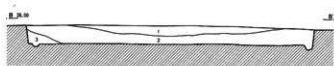
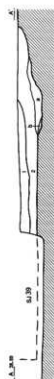
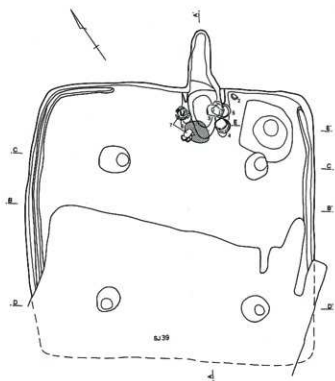
主軸方向はN-35° -Eを指す。主柱穴の配置から推定すると主軸長は4.3m前後と思われる。副軸長4.58mである。平面形態は各壁ラインとも僅かに円みを帯びるが方形と思われる。覆土は大きく2層からなる。炭化物等の含有物は微量であった。

主柱穴の深さはP1=0.47m、P2=0.78m、P3=1.03m、P4=0.74mであった。覆土第1層は抜き取り痕を示していると考えられる。

カマド右側に構築される貯蔵穴は平面形態不整形で、上位で緩やかな段を有する。径0.80×0.80m、深さ0.73mである。なおP1は極めて近接している。貯蔵穴中からは遺物は出土しなかった。

カマドは北壁中央から検出された。楕円形に掘り下げられた燃焼部から緩やかに立ち上がり煙道部に移行する。煙道部底面は傾斜していた。燃焼部長0.88m、同幅0.45m、煙道部長0.82m、同幅0.29mである。燃焼部掘り込みの肩部の被熱硬化が著しかった。掘り込み中の灰層の発達か顕著で、厚さ12cm程堆積していた。支脚等は出土しなかったが、袖補強材と想定される

第107図 第40号住居跡



第40号住居跡土層註

- 1 灰褐色 焼土・炭化物粒子微量
- 2 暗灰褐色 炭化物粒子微量
- 3 暗灰褐色 炭化物粒子少量

柱穴土層註

- 1 暗灰褐色 焼土・炭化物粒子微量
- 1' 暗灰褐色 炭化物粒子多量
- 2 灰褐色 炭化物粒子微量 しまり強し
- 3 灰白色 粘土質 焼土ブロック少量
- 4 灰褐色 焼土・炭化物粒子少量

貯蔵穴土層註

- 1 暗褐色 焼土粒子少量 炭化物粒子微量

0 2m

甕を計5個体検出した。右袖は前方に4、後方に5および3を重ねて使用している。いずれも逆位で出土した。3は燃焼部側に傾斜していた。

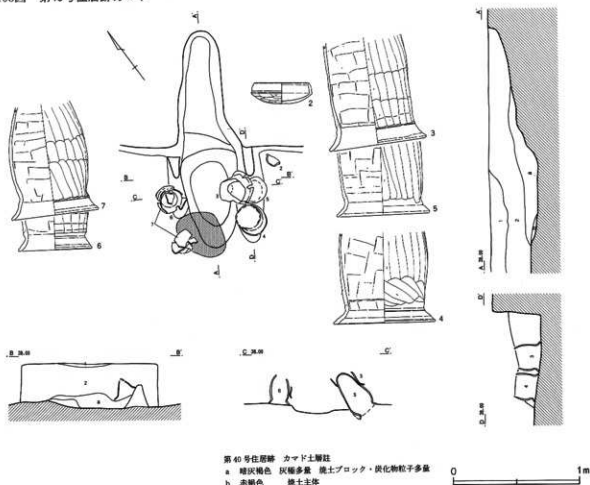
左袖は6と7を重ねて使用している。なお重ねて下

になっていた5と6は完形で、他は胴部下半以下を欠失していた。

出土遺物 (第109図)

カマド袖補強材の甕5個体以外は出土した遺物は少

第108図 第40号住居跡カマド



第40号住居跡 カマド土層註
 a 煉瓦彩色 灰磚多量 壁土ブロック・炭化物粒子多量
 b 赤褐色 壁土主体
 c 黒褐色 壁土主体

ない。図化できたものは有段口縁環と身模倣の坏、土
 錘1個体のみである。

第10号住居跡 (第110図)

第10号住居跡はG-7グリッドに位置する。他遺構
 との重複関係は第9号住居跡を切る。なお床面レベル
 は第9号住居跡より0.1mほど深かった。

主軸方向はN-36°-Eを指す。主軸長2.90m、副
 軸長3.08mであり、やや不整の方形を呈する。

覆土第2層、3層はそれぞれ炭化物層、粘土主体層
 であった。精査に努めたが、貯蔵穴、ピット、壁溝は
 検出されなかった。

カマドは北東コーナー部に構築されていた。袖の遺
 存状況は悪かった。床面と同レベルの燃焼部から緩や
 かに立ち上がり煙道部に移行する。煙道部は緩やかに
 傾斜している。燃焼部長0.60m、同幅0.25m、煙道部

長0.85mである。煙道部底面は緩やかに傾斜しており、
 先端の平面形態はピット状になっていた。カマド内部
 からの遺物の出土はなかった。なお右袖と東壁の間か
 らは幅20cmほどの床面が検出された。

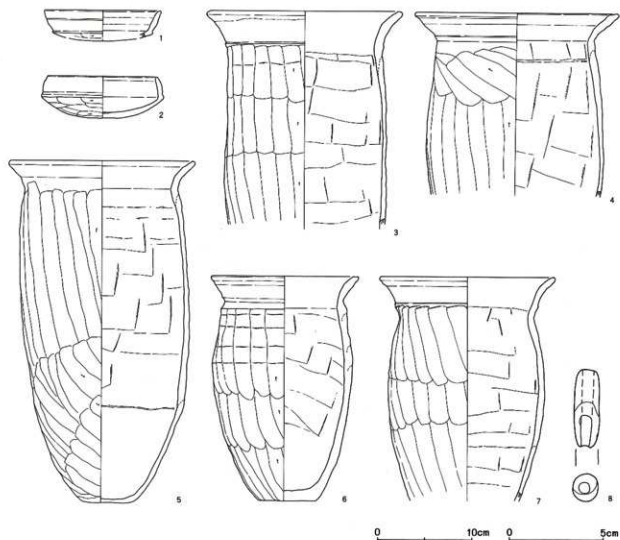
出土遺物 (第110図)

少数の遺物が主に覆土下層から出土した。坏は須恵
 器蓋模倣のものであるが、口径11cm前後、器高3cm前
 後と小形で、底面はフラットになっている。また2の
 体部稜線は体部ケズリのみにより作出されており、鈍
 い。3は大型の鉢の口縁部と思われる。推定口径27.6
 cmである。東壁際より出土した。

第11号住居跡 (第111・112図)

第11号住居跡はG-7グリッドに位置する。他遺構
 との重複関係は第10号住居跡に床面中央を壊されてい
 た。また南西コーナー部が第6号住居跡とおよそ10cm

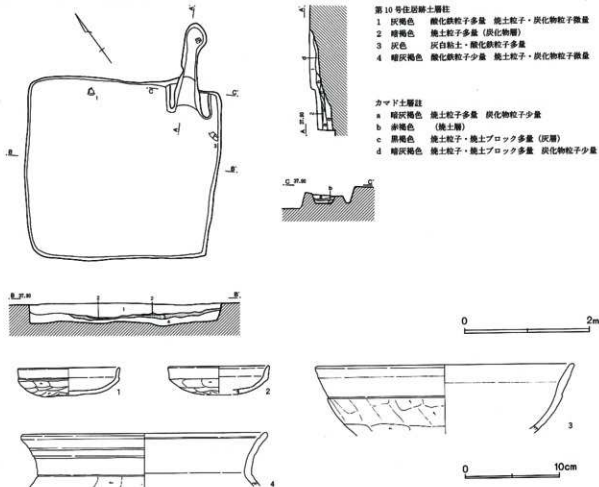
第109図 第40号住居跡出土遺物



第40号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	環	(12.4)	(3.3)		BCGH	C	鈍赤褐	15	
2	環	(11.8)	4.5		BCEGH	C	鈍褐	45	
3	甕	20.8			BCEGH	B	鈍橙	80	右袖補強材 NOSに乗る補強材
4	甕	21.8			BCDEGH	B	橙	90	右袖補強材
5	甕	19.8	36.2	5.0	BCEGH	A	橙	100	右袖補強材 木葉痕
6	甕	15.8	23.8	6.0	BCEGH	B	橙	85	左袖補強材
7	甕	(18.8)			BCGH	A	橙	70	左袖補強材
8	土錘	長(4.22)	径1.48	重(8.10)					欠損

第110図 第10号住居跡・出土遺物



- 第10号住居跡土層柱
- 1 灰褐色 酸化鉄粒子多量 焼土粒子・灰化物粒子微量
 - 2 暗褐色 焼土粒子多量(灰化物層)
 - 3 灰色 灰白粘土・酸化鉄粒子多量
 - 4 暗灰褐色 酸化鉄粒子少量 焼土粒子・灰化物粒子微量

- カマド土層柱
- a 暗灰褐色 焼土粒子少量 灰化物粒子少量
 - b 赤褐色 (焼土層)
 - c 黒褐色 焼土粒子・焼土ブロック多量(灰層)
 - d 暗灰褐色 焼土粒子・焼土ブロック多量 灰化物粒子少量

第10号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	11.0	3.0		BCEGH	B	橙	95	
2	坏	(10.8)	(3.1)		BCEGH	B	橙	25	
3	鉢	(27.6)			BCEGH	B	橙	25	
4	壺	(26.4)			BCGH	B	橙	10	口縁内面沈澱

と極めて近接していたが重複はしていなかった。

主軸方向はN-95°-Eを指す。主軸長5.15m、副軸長5.12mであり、端正な方形を呈する。

覆土は大きく2層からなるが、大半は第10号住居跡に壊されており、詳細は不明である。壁溝は北東コーナー部周辺以外は連続して検出された。

主柱穴の深さはP1=0.04m、P2=0.01mと浅かった。対応する2基の主柱穴は精査に努めたが検出されなかった。第10号住居跡に壊されたと思われる。なおP1-P2の柱間は2.42mであった。

カマド右側に構築されていた貯蔵穴は径1.00×0.80

m、深さ0.58mであり、上位でやや不整な段を有する。

遺物は出土しなかった。またカマド右袖脇からも深さ0.03mのピットが検出された。

カマドは東壁中央から検出された。床面より僅かに高い燃焼部から緩やかに立ち上がり煙道部に移行する。煙道部底面は緩やかに傾斜し、先端には煙出しピットが構築される。燃焼部長0.80m、同幅0.31m、煙道部長1.50m、同幅0.27m、煙出しピットの深さ0.12mである。煙道部の長さか特筆される。袖内面の被熱硬化が顕著であった。また右袖上面からも被熱痕が検出された。

燃焼部中央から検出された石製の支脚はやや奥壁に近く、左袖側に偏る。また支脚を覆うように2、4の環が逆位で出土した。1の環はその上面から破砕して出土した。なお左袖はこれらの遺物集中に対応するよう大きく抉れていた。

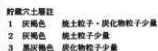
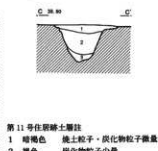
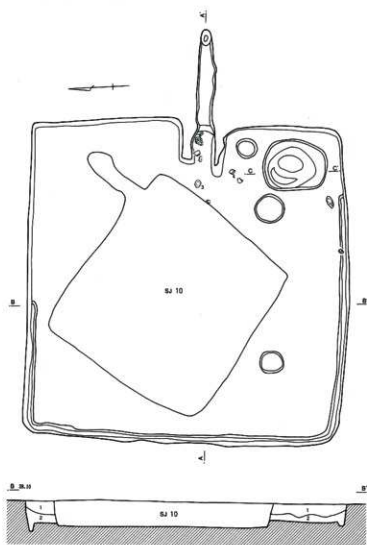
カマド覆土はd、f層が天井部被熱部の崩落土と想

定される。灰層は厚さ約5cm堆積していた。

出土遺物 (第112図)

遺物はカマド内部、周辺から少量出土したのみである。カマド内から重なって出土した環はバラエティーに富み、良好な一括資料である。3の口縁部内面には沈線が巡り、体部は浅い。編物石は2個体出土した。

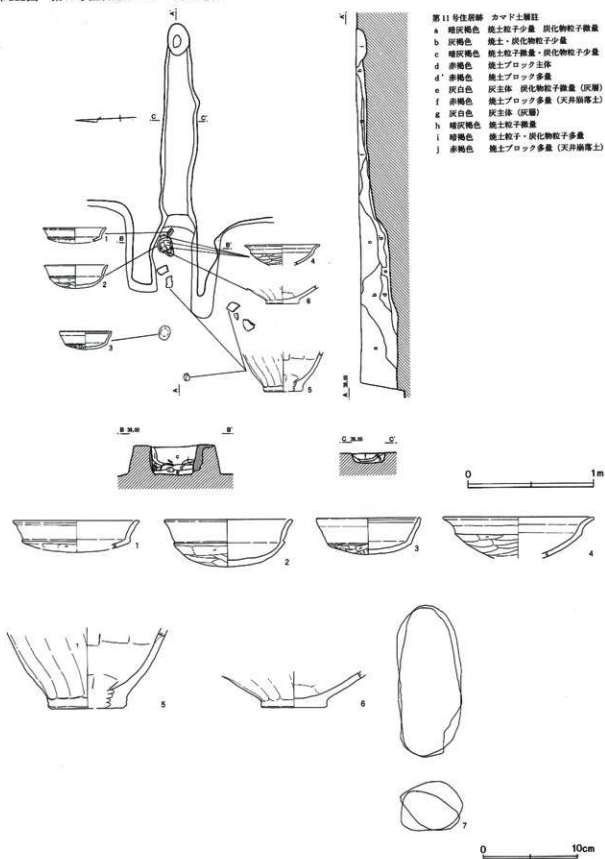
第111図 第11号住居跡



第11号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	環	(13.6)	(3.4)		BCGH	B	橙	20	カマド
2	環	(13.8)	4.9		BCEFGH	B	橙	75	カマド
3	環	11.0	3.9		BCDEG	B	鈍黄橙	100	
4	環	(16.2)			BCEGH	A	明赤褐	60	カマド
5	甕			(7.6)	BCEGH	A	橙	30	カマド
6	甕			(7.0)	BCEGH	B	橙	45	カマド
7	編物石								2個体

第112図 第11号住居跡カマド・出土遺物



(6) 第4住居跡群

第4住居跡群は本調査区より検出された集落跡のほぼ中央に位置する。本群南東部にやや住居跡の稀薄な部分があるが概ね他の住居跡群に囲まれる状況を呈する。本群は13軒の住居跡から構成される。住居跡間の重複は激しかったが、最新相と考えられる住居跡の深度が浅かったことと、コーナー部の切り合いが多かったことから遺存状況は第7号住以外は概ね良好であった。

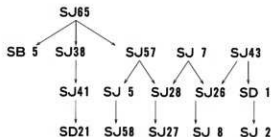
なお本群周辺に1ヶタでの住居跡番号は多いのは、調査段階で湧水の影響が最も小さかったためである。

重複関係からは本群中の最古相は第65号住居跡、第7号住居跡、第43号住居跡となる。また最新相は58住、27住、8住、2住となる。

また本群中で確認された溝跡と住居跡との重複関係は43住→1溝→2住となる。なお第21号溝は41号住を壊していた。

住居跡形態は重複関係から最新相と判断された8、2号住等が横長長方形を呈する。また隅カマドを有し定型的な貯蔵穴、柱穴を有さない。なおこれらの住居跡の主軸方向がいずれも北東を向いていることも注目されるよう。遺物の出土傾向を概観すると41号住と26号住からは極めて多量の遺物が出土した。41号住からは比企型環が出土している。26号住からは長胴甕計7個体等がほぼ完形で検出された。第43号住から長さ4mを越える炭化材が検出されたことも特筆されよう。

第4住居跡群重複関係



第41号住居跡(第114~116図)

第41号住居跡はE-8・9グリッドに位置する。他遺構との重複関係は本住居跡の煙道部先端が第38号住居跡の壁上面を壊す。また第21号溝に壁上面を一部壊されていた。

主軸方向はN-148°-Eを指す。主軸長5.15m、副軸長4.85mであり、やや歪んだ方形を呈する。断続的に壁溝が巡る。

覆土は大きく3層からなるが上層には一部炭化物層が認められた。

主柱穴の深さはP1=0.78m、P2=0.71m、P3=0.67m、P4=0.75mといずれも深度がある。柱間はP1-2.46m-P2-2.50m-P3-2.23m-P4-2.46m-P1であった。配列はやや不整であった。また東壁際には0.11mと浅いP5が検出された。

カマド右側に構築される貯蔵穴Aは、平面形態隅円方形を呈し、径0.94m×0.76m、深さ0.4mであり上位で不整な段を有する。下層より遺物が出土した。

西壁際の貯蔵穴Bの平面形態は、不整な楕円形である。深さは0.25mである。覆土中より遺物が出土した。

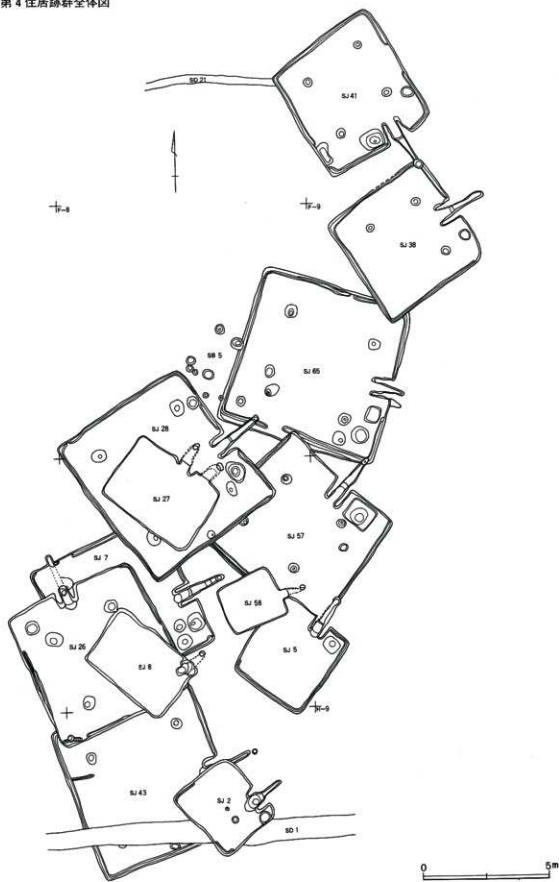
カマドは南壁東よりから検出された。床面より僅かに低い燃焼部から小さく立ち上がり煙道部に移行する。煙道部底面は緩やかに傾斜し、先端には煙出しピットが構築される。煙道部天井の一部は残存していた。

カマドの規模は、燃焼部長0.84m、同幅0.36m、煙道部長1.45m、同幅0.34mである。火床面、袖内面、残存する天井部内面、煙出しピットの壁面は被熱硬化が顕著であった。

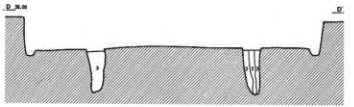
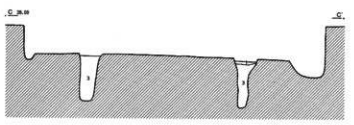
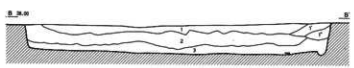
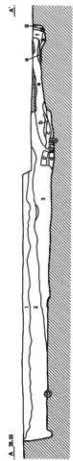
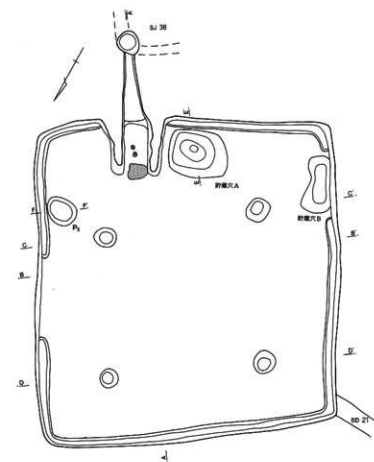
カマド内部からは2個体の河原石製の支脚が直列して検出された。前方の支脚は底面直上に設置され、それを覆うように底部を欠損した32の小形甕が逆位で検出された。後方の支脚は燃焼部底面に6cmほど食い込むように設置されていた。

カマドの上層については、被熱した天井崩落土が明瞭に識別できた。なお支脚付近において天井崩落土の断絶が認められた。また灰層の発達が顕著で最大10cmほど堆積していた。

第113图 第4住居跡群全体图



第114図 第41号住居跡



第41号住居跡土層註

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 1' 暗褐色 炭化物粒子多量
- 1'' 暗褐色 炭化物粒子極多量
- 2 暗灰褐色 焼化鉄粒子多量 焼土粒子・炭化物粒子微量
- 3 灰褐色 焼化鉄粒子多量 焼土・炭化物粒子少量

住穴土層註

- 1 暗灰褐色 炭化物多量
- 2 暗灰褐色
- 3 灰褐色 暗灰褐色土少量

P S 土層註

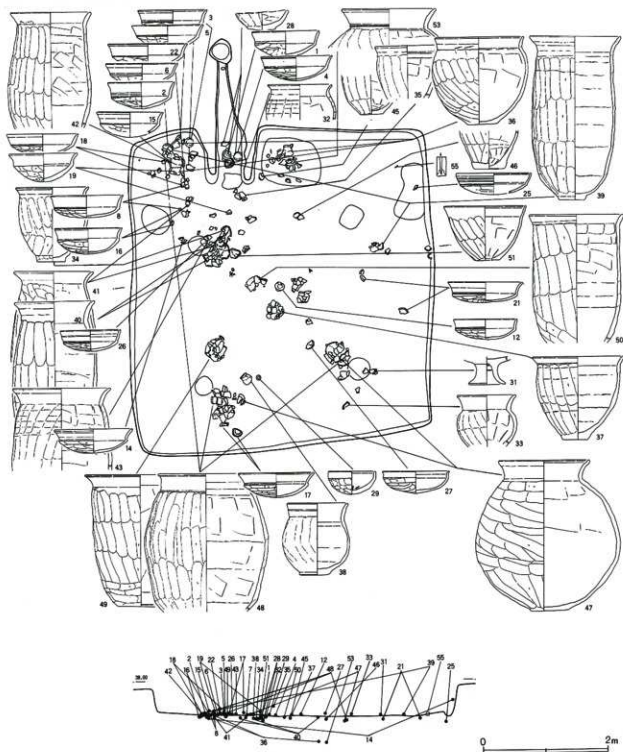
- 1 黒褐色 灰燼多量 焼土粒子・ブロック多量

貯蔵穴土層註

- 1 暗褐色 炭化物粒子微量
- 2 暗褐色 炭化物粒子少量
- 3 褐色 炭化物粒子微量



第115図 第41号住居跡遺物分布図



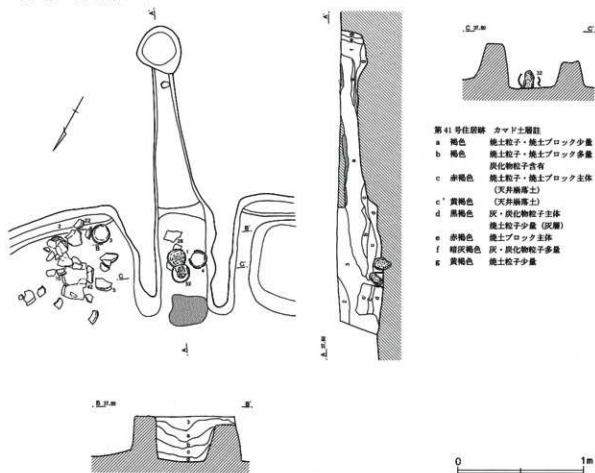
出土遺物 (第117~119図)

多量の遺物が覆土下層～床面直上から出土した。出土傾向としては、ブロック状に遺物の集積が数カ所認められたが、14、48等、住居跡全域で接合関係が認められた。なおカマド左側に環がやや集中する傾向に

あった。

環は蓋模倣が主体を占める。10、14等、口径が6cm以上の口縁部が大きく外反するものが多い傾向にある。25、26は有段口縁環である。25は貯蔵穴Bの覆土下層、26は床面直上から出土している。

第116図 第41号住居跡カマド



- 第41号住居跡 カマド土層誌
- a 褐色 焼土粒子・焼土ブロック少量
 - b 褐色 焼土粒子・焼土ブロック多量
炭化物粒子含有
 - c 赤褐色 焼土粒子・焼土ブロック主体
(天井崩落土)
 - c' 黄褐色 (天井崩落土)
 - d 黒褐色 灰・炭化物粒子主体
焼土粒子少量 (灰層)
 - e 赤褐色 焼土ブロック主体
 - f 暗灰褐色 灰・炭化物粒子多量
 - g 黄褐色 焼土粒子少量

27は覆土下層から出土した比企型である。口縁部上位で強く屈曲するが、口縁部内面に沈線はない。内外面に赤彩を施す。本資料は胎土分析を実施した。29の内面には工具痕が明瞭に残っていた。

長胴甕はいずれも口縁部の外反が緩やかである。端部は丸く収まるものが主体を占める。

49、50の甕はいずれも胴部はほぼ直立し、頸部の屈曲が明瞭である。50の内面には黒色の付着物が斜位に付着していた。52は須恵器製胴部である。内面に同心円叩きか施される。55は碧玉製管玉の破損品である。穿孔方向が明瞭であった。

第38号住居跡 (第120・121図)

第38号住居跡はE・F-9グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第65号住居跡を切り、第41号住居跡に切られる。また第21号溝に切られるが、いずれも壁上面の一部が壊されていたのみであり、遺存状況

は良好であり、残存壁高は0.55mであった。

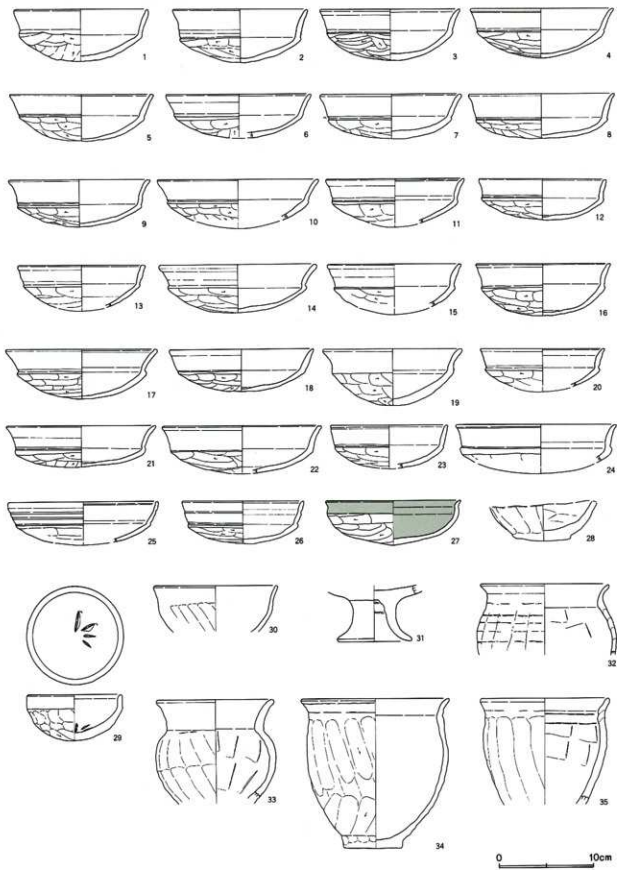
主軸方向はN-56°-Eを指す。主軸長4.72m、副軸長4.75mであり、端正な方形を呈する。カマド右側以外に連続して壁溝が巡る。北側の床面が緩やかに傾斜して低くなっていた。覆土には焼土、炭化物が多量に含有されていた。また覆土上層からは部分的に炭化物層が2枚検出された。

主柱穴は精査を重ねたが南東の1基が検出されなかった。深さはP1=0.58m、P3=0.49m、P4=0.45mであった。柱間はP1-2.35m-P4-2.10m-P3であった。

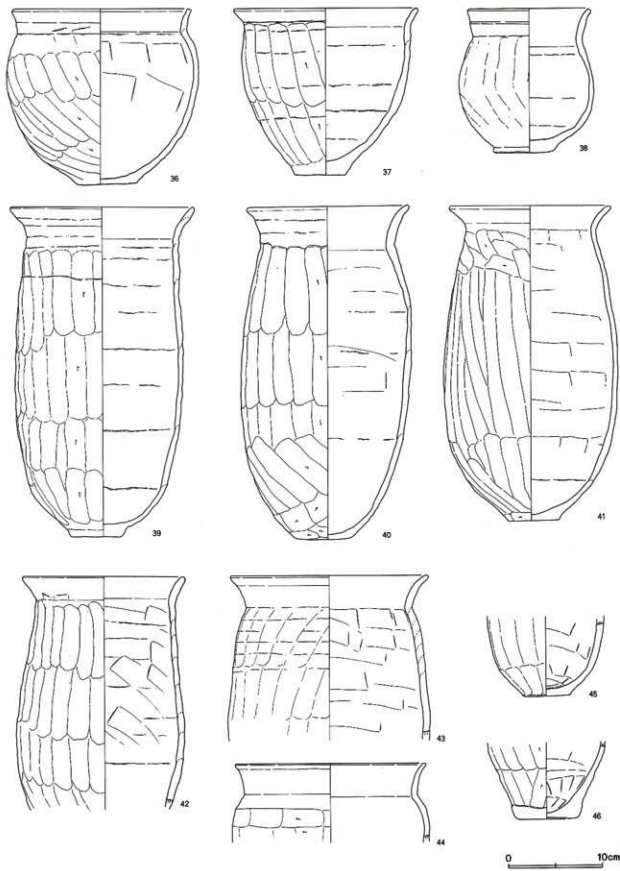
カマド右側に構築される貯蔵穴は径0.42×0.41mの平面円形で、深さ0.39mであった。上層から7の甕が出土した。

カマドは北壁中央から検出された。床面と同レベルの燃焼部からやや強く立ち上がり煙道部に移行する。

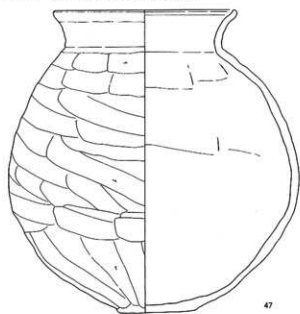
第117図 第41号住居跡出土遺物(1)



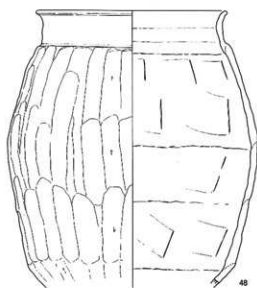
第118図 第41号住居跡出土遺物(2)



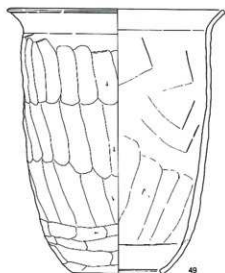
第119図 第41号住居跡出土遺物(3)



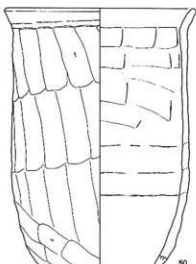
47



48



49



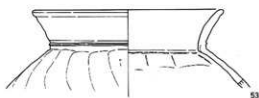
50



51



52



53



55

0 10cm

0 5cm

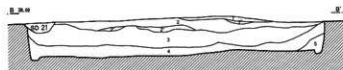
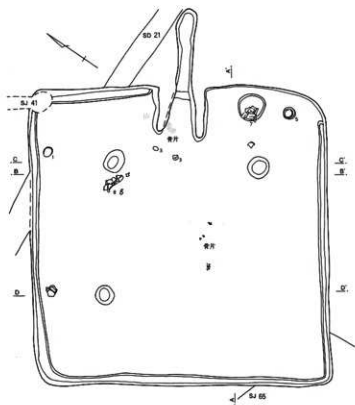


54

第41号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	14.2	5.5		BCEGH	B	鈍橙	100	カマド
2	坏	14.2	5.6		BCDEGH	B	橙	100	
3	坏	15.0	5.4		BCDEGH	B	橙	100	
4	坏	15.2	5.3		BCDEGH	B	橙	90	カマド 胎土分析 NO1
5	坏	15.6	5.0		BCEGH	A	明赤褐	95	
6	坏	15.6	(4.6)		BCEGH	B	橙	75	
7	坏	15.0	4.2		BCEGH	B	橙	85	
8	坏	15.6	4.6		BCEGH	B	橙	75	
9	坏	(15.0)	5.0		BCEGH	A	橙	25	
10	坏	(17.2)	(5.2)		BCEGH	A	橙	45	
11	坏	(14.9)	(5.1)		BCDEGH	B	橙	25	
12	坏	13.6	4.4		BCEGH	A	明赤褐	100	
13	坏	(13.6)	(4.8)		BCEGH	B	橙	25	
14	坏	16.8	5.1		BCDEGH	A	赤褐	85	胎土分析 NO3
15	坏	(14.4)	(5.3)		BCEGH	B	橙	15	
16	坏	(14.4)	5.5		BCEGH	C	橙	25	
17	坏	16.2	5.2		BCEGH	B	橙	95	二次被熱 胎土分析 NO2
18	坏	(15.4)	4.5		BCGH	C	橙	25	
19	坏	(15.0)	6.0		BCEGH	C	橙	30	
20	坏	(13.2)	(4.5)		BCEGH	C	橙	25	
21	坏	16.0	4.4		BCEGH	A	赤	95	
22	坏	(17.0)	(5.1)		BCEGH	A	明赤褐	30	
23	坏	(12.6)	(4.6)		BCDEGH	A	褐	30	
24	坏	(17.1)	(5.2)		BCEGH	B	橙	25	
25	坏	(16.2)	(4.5)		BCDEGH	A	鈍赤褐	20	貯蔵穴B
26	坏	13.0	4.5		BCDEGH	B	鈍橙	70	胎土分析 NO4
27	坏	14.4	4.7		CGHI	A	赤	50	比企型 内外面赤彩 胎土分析 NO5
28	甕	[11.4]	[3.8]	6.6	BCGH	B	赤	75	カマド 転用鉢 木葉痕
29	坏	10.2	4.9		BCEG	A	灰褐	100	工具痕
30	鉢	13.4			BCDEGH	B	橙	20	
31	高坏			8.0	BEGH	B	黄橙	70	
32	甕	13.8			BCDEGH	B	橙	100	カマド 転用支脚
33	壺	12.6			BCDEGH	A	鈍赤褐	30	
34	甕	15.8	15.9	6.7	BCEGH	C	鈍黄橙	70	
35	甕	(13.8)			BCEGH	C	橙	30	カマド内一括と接合
36	甕	19.2	18.6	6.4	BCDGH	B	橙	75	貯蔵穴A
37	甕	19.6	17.4	5.4	BCEGH	B	鈍橙	85	
38	甕	13.2	15.2	6.5	BCEGHJ	B	橙	90	
39	甕	19.6	34.9	5.5	BCDEGH	C	鈍黄橙	75	カマド内一括と接合
40	甕	17.4	35.2	6.0	BCEGH	B	橙	80	
41	甕	17.2	33.4	5.4	BCEGH	A	明赤褐	80	
42	甕	17.4			BCDEGH	B	橙	80	
43	甕	(21.2)			BCEGH	B	橙	25	
44	甕	(20.4)			BCEGH	A	橙	35	
45	壺			5.0	BCEGH	B	橙	70	
46	甕			6.4	BCEH	B	鈍褐	70	木葉痕
47	壺	19.6	32.5	8.6	BECH	B	橙	75	
48	甕	20.4			BCDEGH	A	褐灰	70	貯蔵穴一括と接合
49	甕	23.2	28.0	9.5	BCDEGH	B	鈍黄橙	90	
50	甕	20.4			BCGH	B	橙	35	内面斜位黒色化
51	甕	17.6	11.6	5.4	BCEGH	B	鈍黄橙	80	孔径=2.2cm
52	須恵器甕				CH	B	灰		内面同心内印き 白磁微量
53	壺	20.4			BCEGH	B	鈍橙	75	貯蔵穴A
54	編物石								2 個体
55	管玉	長(2.05)	径1.01						碧玉製

第120图 第38号住居跡



第38号住居跡土層註

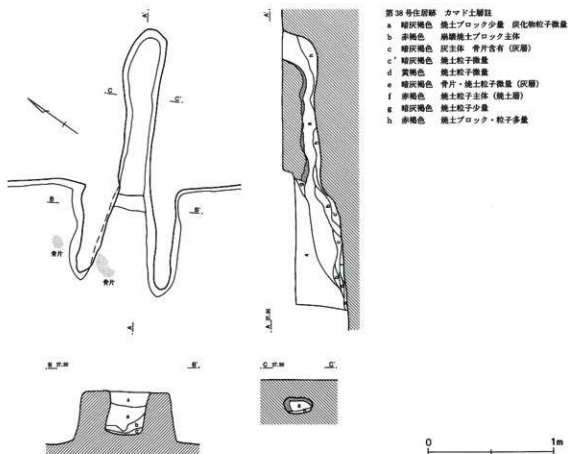
- 1 暗褐色 礫化鉄粒子・焼土粒子少量
炭化物粒子多量
- 1' 暗褐色 炭化物粒子極多量
- 2 黄褐色 礫化鉄粒子多量 炭化物粒子少量
焼土粒子微量
- 2' 黄褐色 炭化物粒子多量
- 3 灰褐色 礫化鉄粒子多量
焼土粒子・炭化物粒子少量
- 4 暗灰褐色 礫化鉄粒子・炭化物粒子少量
焼土粒子多量
- 4' 暗灰褐色 焼土粒子多量
- 5 灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量

柱穴土層註

- 1 灰黄褐色 炭化物粒子微量
- 2 灰黄褐色 しまり強し

0 2m

第121図 第38号住居跡カマド



煙道部底面は緩やかに傾斜し、先端には浅い煙出しピットが構築される。燃焼部長0.74m、同幅0.36m、煙道部長1.32m、同幅0.20mである。煙道部天井は一部残存しており内面の被熱硬化が著しかった。灰層の発達が顕著であった。

出土遺物 (第122図)

少量の遺物が覆土層を中心に出土した。また覆土層からは微小な骨片が散逸して出土したが脆弱で同定には至らなかった。

1の環は口縁部に段を有するが成形段階でのアクシデンタルなものと思われる。3の環の口縁部上位内外面には接合痕が明瞭に残る。4の環は体部の稜が不明瞭で口縁部上位で小さく外反する。器面状態が不良で、赤彩痕は認められなかった。

5の壺口縁は北東コーナー部床面直上より逆位にて出土しており、転用器台の可能性もある。

第65号住居跡 (第123・124図)

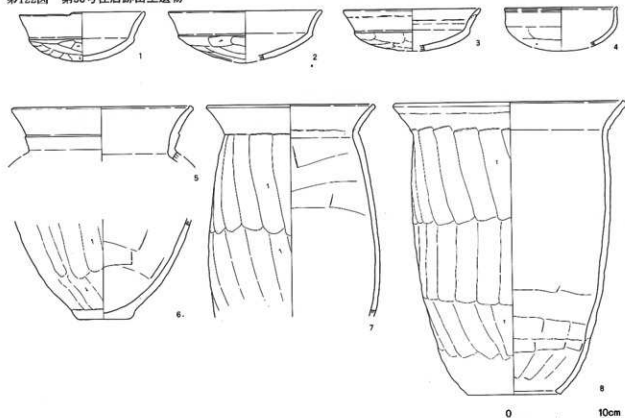
第65号住居跡はF-8・9グリッドに位置する。

他遺構との重複関係は第38、57、28号住居跡に切られており、重複関係からすると第4住居跡群中、最古相の中の1軒である。ただしいずれも壁際のみ壊されており、残存状況は概して良好であった。また第5号掘立柱建物跡に床面の一部を壊されていた。

主軸方向はN-107°-Eを指す。主軸長6.44m、副軸長6.05mであり、端正な方形を呈する。断続した壁溝が巡る。覆土第2層には多量の炭化物が含有していた。また第4層からも焼土粒子、炭化物粒子が多量に検出された。

主柱穴の深さはP1=0.82m、P2=0.72m、P3=0.73m、P4=0.90mである。柱間はP1-3.25m-P2-3.36m-P3-3.54m-P4-3.24m-P1であった。柱穴覆土は抜き取り痕を示して

第122図 第38号住居跡出土遺物



第38号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	13.8	5.2		BCEGH	B	橙	100	口縁部成形時段差あり
2	坏	(16.4)	(5.5)		BCDEGH	A	明赤褐	50	
3	坏	(14.6)	(4.4)		BCEGH	B	橙	50	
4	坏	(12.2)	(4.6)		BCEGH	B	橙	25	
5	壺	19.5			BCEGH	B	橙	100	器面磨耗 赤彩不明
6	甕			5.4	BCDEGH	B	灰褐	65	床直逆位
7	甕	(18.0)			BCEGH	B	鈍橙	70	貯蔵穴
8	甕	(24.8)	30.9	(9.8)	BCEGH	C	鈍黄橙	30	

いるものと思われる。なおP4覆土中層からは16の小形の甕が出土している。

カマド右側から2基の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴Aは平面円形を呈し、径0.69×0.70m、深さ0.57mである。遺物は出土しなかった。

貯蔵穴Bは平面形態隅円方形を呈し、径0.57×0.65m、深さ0.18mである。覆土中より遺物が出土した。

貯蔵穴BはカマドA袖の存在を考慮すると重複すると思われる、あるいはカマドの付け替えに伴って貯蔵穴もAからBに造り替えた可能性がある。

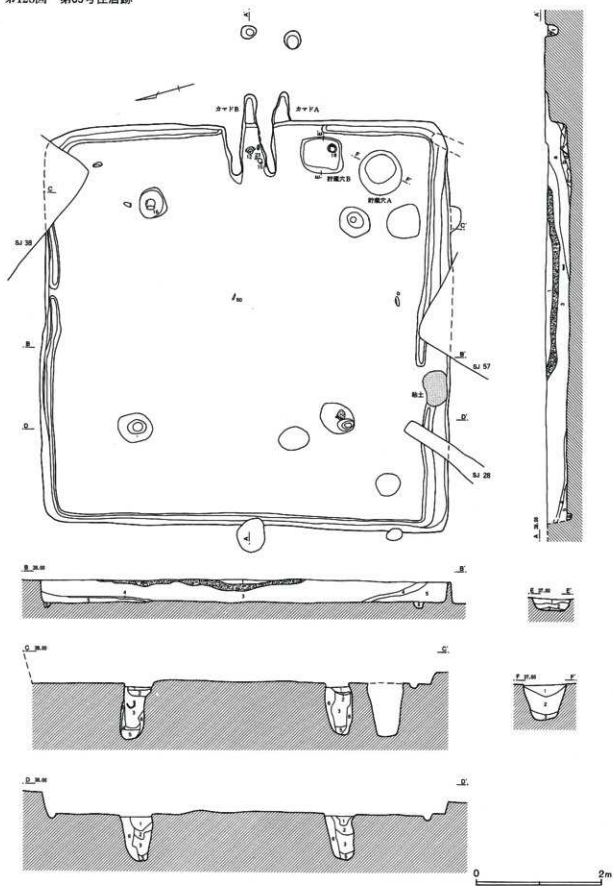
カマドは東壁中央から2基検出された。いずれも煙

道部の延長上に炭化物および焼土を伴うピットが検出されたことからそれぞれのカマドの煙出しピットと認定した。カマドAには袖が伴わず、AからBへの造り替えが想定される。

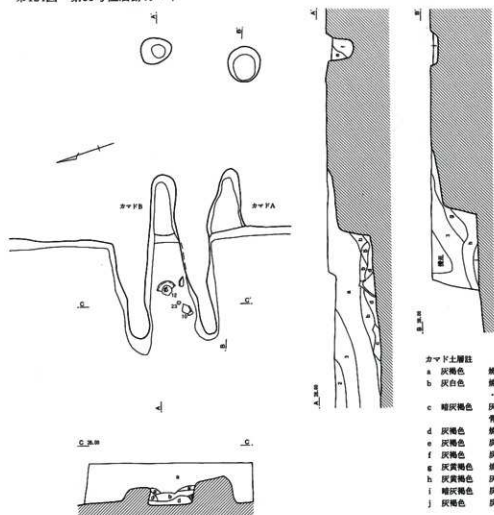
カマドAは床面と同レベルの燃焼部からほぼ直角に立ち上がり煙道部に移行する。煙道部長1.45mである。なお推定燃焼部には灰層が薄く残存していた。

カマドBは燃焼部長0.90m、同幅0.34m、煙道部長1.55mであった。カマドAと同様、床面と同レベルの燃焼部からほぼ直角に立ち上がり煙道部に移行する。燃焼部上には脚部以下を欠失した12の高環が逆位で検

第123図 第65号住居跡



第124図 第65号住居跡カマド



第65号住居跡土層註

- 1 灰褐色 焼土粒子・炭化物少量
- 2 灰褐色 炭化物多量 焼土ブロック少量
- 3 灰黄褐色 焼土粒子・炭化物少量
- 4 灰黄褐色 焼土粒子・炭化物多量 炭微量
- 5 暗灰褐色 焼土粒子・炭化物少量
- 6 暗灰褐色 粘土質

貯蔵穴・目土層註

- 1 灰黄褐色 焼土粒子・炭化物少量
- 2 暗灰褐色 焼土粒子・炭化物少量
- 3 灰色 炭化物粒子少量 粘土質

柱穴土層註

- 1 暗灰褐色 焼土粒子微量 炭化物粒子少量
- 2 暗灰褐色 焼土粒子少量 炭化物粒子多量
- 3 暗灰褐色 炭化物粒子微量
- 4 黄褐色 炭化物粒子微量 灰白色粘土含多量
- 5 灰白色 粘土質
- 6 灰黄褐色 灰色粘土少量 しまり強し

カマド土層註

- a 灰褐色 焼土粒子微量 炭化物少量
- b 灰白色 焼土粒子・焼土ブロック・炭化物粒子・灰少量
- c 暗灰褐色 灰主体 焼土粒子少量 骨粉微量 (灰層)
- d 灰褐色 焼土ブロック少量
- e 灰褐色 炭化物・灰多量 焼土ブロック少量
- f 灰褐色 炭化物粒子少量 焼土粒子微量
- g 灰黄褐色 焼土ブロック・灰少量
- h 灰黄褐色 灰主体 骨粉微量 (灰層)
- i 暗灰褐色 炭化物粒子少量 焼土粒子多量
- j 灰褐色 炭化物・灰多量 焼土ブロック少量

出された。転用支脚と想定される。

出土遺物 (第125・126図)

遺構の遺存状況は良好であったが、遺物は少量が散在して出土したのみである。

環は口径13cm前後の蓋縁微が主体を占める。口縁部は外傾、あるいは緩やかに外反するものが多い。

23はミニチュア土器である。指頭により整形される。また土鍾が22個体出土している。これは本調査区出土

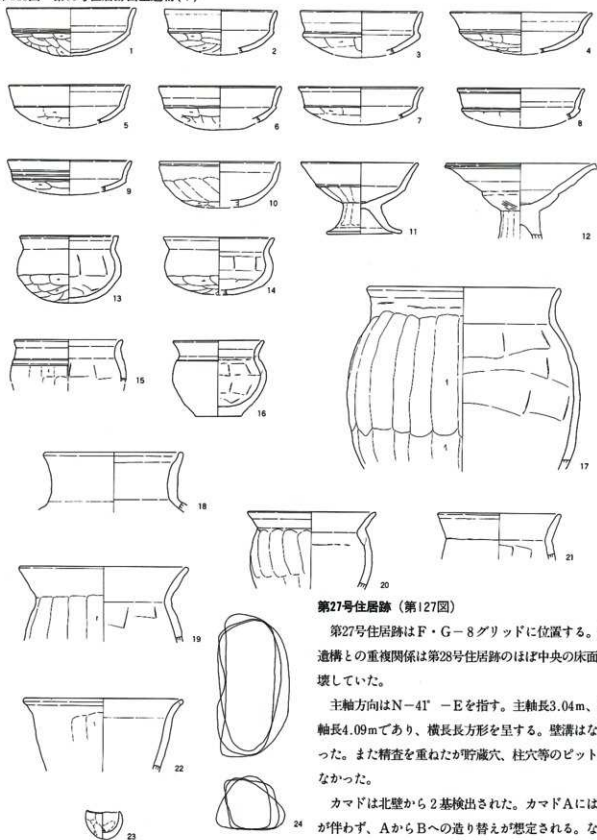
土鍾の総数のおよそ、1/5である。

47は土製紡錘車である。本遺跡からは他に第69号住居跡から石製紡錘車が出土したのみである。

48は欠損した剣形石製模造品である。現存長4.98cmを測る。

50は鉄製の刀子である。覆土下層から出土した。錆化が顕著であった。刃部先端を欠損する。なお目釘孔はX線撮影からおこした。

第125図 第65号住居跡出土遺物(1)



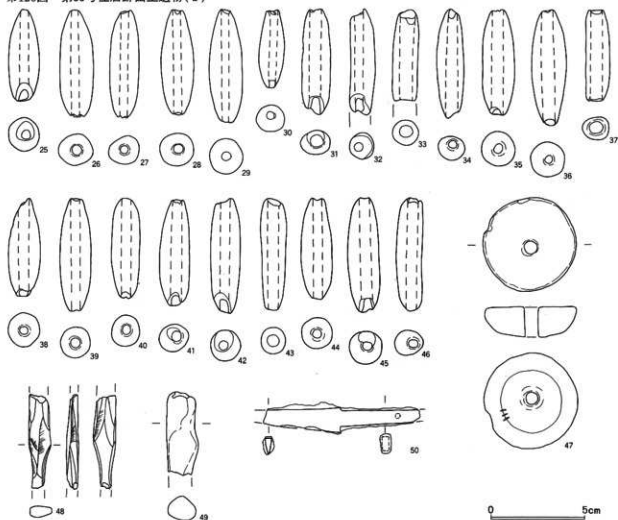
第27号住居跡 (第127図)

第27号住居跡はF・G-8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第28号住居跡のほぼ中央の床面を壊していた。

主軸方向はN-41°-Eを指す。主軸長3.04m、副軸長4.09mであり、横長長方形を呈する。壁溝はなかった。また精査を重ねたが貯蔵穴、柱穴等のピットもなかった。

カマドは北壁から2基検出された。カマドAには袖が伴わず、AからBへの造り替えが想定される。なおいずれも煙道部天井が未崩落であった。カマドAは床面と同レベルの燃焼部から水平に煙道部に移行する。

第126図 第65号住居跡出土遺物(2)



煙道部長0.37mである。なお推定燃焼部には灰層が薄く残存していた。カマドBは燃焼部長0.28m、同幅0.43m、煙道部長0.89mであった。カマドAと同様、床面と同レベルの燃焼部から水平に煙道部に移行する。燃焼部からは遺物は出土しなかった。

出土遺物(第127図)

出土遺物は少なかった。1の須恵器は第3号住居跡との遺構間接合であるが、いずれも覆土中出土であり帰属する遺構の認定はできない。「X」へう記号が認められる。胎土に白色の垂角礫を多量に含有する。また床面外縁部からは30個体の細石が出土した。出土傾向としては北西コーナー部と東壁際の2ヶ所に集中する。長さ14.6cm前後、厚さ4cm前後と非常に近似した数値を示している。

第28号住居跡(第128・129図)

第28号住居跡はF-7・8、E-8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第27号住居跡が本住居跡のほぼ床面中央を壊していた。また第57、7号住居跡を本住居跡が壊していた。

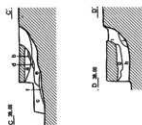
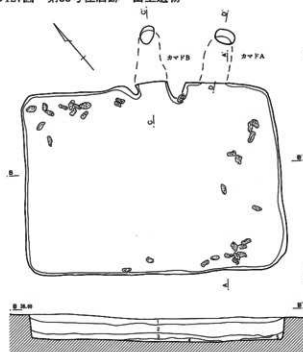
主軸方向はN-54°-Eを指す。主軸長5.93m、副軸長6.60mであり、僅かに横長な方形を呈する。断続しながら壁溝が全壁際を巡っていた。

覆土の大半は第27号住居跡に壊されていたが、下層の第2層からは炭化物と焼土ブロックが多量に検出された。主柱穴の深さはP1=0.83m、P2=0.45m、P3=0.55m、P4=0.75mである。柱間はP1-3.59m-P2-3.92m-P3-3.60m-P4-3.86m-P1であり、他住居と比較すると、柱間が長いと言

第65号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	13.8	5.1		BCEGH	B	橙	80	
2	坏	(12.0)	(4.8)		BCEGH	B	橙	25	
3	坏	(13.1)	(4.9)		BCEFGH	B	橙	35	
4	坏	(15.2)	(4.5)		BCDEGH	B	橙	30	カマドB
5	坏	(13.0)	(4.6)		BCEGH	A	橙	25	
6	坏	(13.2)	(4.6)		BCEGH	A	橙	15	
7	坏	(13.3)			BCGH	B	鈍橙	25	
8	坏	(13.6)	(4.2)		BCEGH	C	鈍橙	15	
9	坏	(13.2)	(3.7)		BCDEGH	A	鈍赤褐	20	
10	坏	(13.0)	(4.9)		BCEGH	A	明赤褐	25	カマドB
11	高坏	12.5	7.6	8.0	BCDEFGH	B	橙	70	
12	高坏	16.4			BCEGH	B	橙	70	カマドB 転用支脚
13	鉢	10.5	7.2	3.8	BCEGH	A	橙	45	
14	鉢	(13.8)	(6.1)		BCH	A	赤褐	45	
15	鉢	(11.6)			BCEGH	A	鈍赤褐	25	
16	壺	9.8	8.0	4.9	BCDEGH	A	明赤褐	90	内内
17	甕	(20.8)			BCEGH	B	橙	50	
18	甕	15.0			BCDEGH	B	橙	100	貯蔵六B
19	甕	(18.2)			BCEGH	B	橙	30	
20	甕	(13.7)			BCEGH	B	橙	25	
21	甕	(13.2)			BCH	A	橙	40	
22	甕	(17.1)			BCEGH	B	灰褐	15	
23	ミカド	3.4	3.0		BCGH	A	明赤褐	100	カマド B 指頭により成形 3個体
24	繩物石								
25	土鍬	長4.92	径1.83	重15.22					
26	土鍬	長5.67	径1.90	重19.99					
27	土鍬	長5.75	径1.78	重16.42					
28	土鍬	長5.60	径1.94	重18.16					
29	土鍬	長6.14	径1.96	重22.51					
30	土鍬	長4.13	径1.54	重7.81					
31	土鍬	長5.62	径1.68	重12.61					
32	土鍬	長(5.60)	径1.56	重12.38					欠損
33	土鍬	長(4.88)	径1.50	重9.90					欠損
34	土鍬	長5.77	径1.61	重11.94					
35	土鍬	長5.64	径1.94	重18.88					
36	土鍬	長6.15	径2.00	重22.26					
37	土鍬	長4.86	径1.53	重10.62					
38	土鍬	長5.29	径1.92	重16.69					
39	土鍬	長5.93	径1.82	重19.51					
40	土鍬	長5.31	径1.86	重17.40					
41	土鍬	長5.66	径1.78	重14.60					
42	土鍬	長6.11	径1.76	重17.72					
43	土鍬	長5.93	径1.57	重14.14					
44	土鍬	長5.40	径1.85	重17.40					
45	土鍬	長6.17	径1.92	重21.71					
46	土鍬	長6.12	径1.58	重13.92					
47	紡錘車	上径4.98	下径3.28	厚さ1.73	重42.09				土製
48	刺杉模造品	長(4.98)	幅1.16	厚さ0.64	重5.63				先端・基部欠損
49	不明土製品	長(4.47)	幅1.85	厚さ1.39	重12.17				欠損
50	刀子	長(8.3)	茎長4.4	刃部幅1.4	茎幅0.9				錆化顕著 X線撮影実施

第127図 第33号住居跡・出土遺物



第27号住居跡土層註

- 1 暗灰褐色 炭化鉄粒子多量 焼土粒子・炭化物粒子微量
- 2 灰褐色 炭化鉄粒子多量 炭化物粒子少量 焼土粒子微量
- 3 灰褐色 炭化鉄粒子少量 炭化物粒子・焼土粒子微量
- 4 灰褐色 炭化鉄粒子少量 炭化物粒子多量 焼土粒子微量
- 5 灰黄褐色 炭化鉄粒子多量 炭化物粒子少量 焼土粒子微量

カマド土層註

- a 灰褐色 焼土ブロック微量
- b 灰褐色 焼土ブロック多量
- c 暗灰褐色 炭化物粒子・焼土粒子微量
- d 灰黄褐色 (天井崩落土)
- e 暗褐色 融練焼土ブロック多量 炭化物粒子少量
- f 暗灰褐色 灰多量 骨片微量 (灰層)
- g 暗灰褐色 焼土ブロック多量
- h 暗灰褐色 焼土ブロック・炭化物粒子少量
- i 暗灰褐色 炭化物粒子多量



第27号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	須恵器平瓶				C	A	灰		SJ-3と接合 白亜角礫多 ヘラ記号あり
2	編物石								16個体
3	編物石								14個体
4	土鏝	長5.74	径1.99	重20.49					

える。

2基の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴Aはカマド右側に位置する。平面形態は不整形であり、上位で緩い段を有する。径0.92×0.70m、深さ0.70mである。貯

蔵穴Bはカマド西側に位置する。径0.48×0.45m、深さ0.10mである。貯蔵穴からの遺物の出土はなかった。

カマドは北壁中央から検出された。床面と同レベルの燃焼部から急激に立ち上がり煙道部に移行する。煙

第128图 第28号住居跡

